

共同研究——歎異抄異本研究

目次

研究篇 一三五

織田 顕信

対校本文篇 一五七

小島 恵昭

渡邊 信和

研究篇

はじめに

(一) 歎異抄の諸本について

(二) 翻刻諸本解題

(1) 蓮如写本

(2) 専精寺本

(3) 蓮生寺本

(4) 三舟文庫本

(三) 歎異抄流伝考

(1) 永正十六年本とその周辺

(2) 実悟と歎異抄

(3) 常楽寺本について

(4) 上宮寺本について

(5) 康楽寺本について

(6) 新出安福寺本・光善寺本について

おわりに

はじめに

本学園では昭和五十二年四月、当佛教文化研究所が設立されて以来、長期にわたる研究課題の一つとして、歎異抄の総合研究に取り組んでき

た。その方法として共同研究を選んだ。

先ず、研究所構成員全体による歎異抄輪読会を発足させて、共同研究に備えることとした。テキストには、歎異抄研究には欠くことの出来ない蓮如写本の影印本を選んだ。それも、月二・三回のペースで開始された。この輪読会と並行して、年四・五回をめどに、学内外より講師を招いて公開講座も行なってきた。研究途上にあった我々にとって、この公開講座を担当して下さった諸先学より、多くの有益な教示を得ることが出来たことは、大きな成果であった。

又、共同研究をより効果的に推進させる必要から、古写本の収集、研究文献の調査、その他これに関する情報収集は欠くことの出来ないものとして、輪読会全日程終了後も継続して行なわれ、今日に至っている。この作業は今後も引続き行なわれねばならないであろう。⁽¹⁾

さて当研究所が何故、歎異抄研究という課題を設定し取組むことになったかという動機について触れておく必要がある。

元来、真宗の宗典の一つでしかなかった、この歎異抄が、今日みられるように、真宗の粹を越えて関心の示し方は様々ではあるが多くの人々に迎え入れられるに至った社会的背景を分析して、歎異抄のもつ今日的課題を解明してみたいと考えたことが出発点となったのである。

そこで本論に入る前に、今日的狀況を呈するに至った過去を振り返っておきたい。

十七世紀後半の寛文年間に円智の『歎異抄私記』が刊行されて、研究

が始まったと一般に考えられている。以来三百有余年が経過した。その間夥しい数の人々が、ここに携ってきたことはいうまでもない。

このうち、初めの二百年余り、すなわち明治以前は、宗典研究という立場を離れることをしなかった。従って、宗外で本書が扱われることは殆んど無かったといつてよい。それが、明治に入つて、近角常観や清沢瀧之等によつて、新時代に対応した意義が見出されて以来、宗内という枠を超えて、知識人層にも新に迎えられる。やがて海外移民団の二世・三世の伝導教化策として開始せられた歎異抄の外国語訳本も出版されるに至つて、海外での本書研究の端緒をも開いた。国内にあっては戦後、教育内容の一部として教科書にも登場し、益々歎異抄研究者や読者層は拡大していった。

この間に、歎異抄への関り方は多様化し、夥しい情報が提供せられ、その情報整理にも万全を期すことが不可能に近い現況を呈するに至つた。そこに見い出された歎異抄に対する今日的意義も宗典であることは勿論、人生の指南書、知識人の教養書、親鸞思想解明の原点としての哲学・思想書として、或は国語学史上の、教育のための資料等、歎異抄への関り方、読者の置かれている立場によつて様々な評価を得てきたことは周知のことであろう。

このような歎異抄の今日置かれている情況に鑑みて、当研究所では、学際的研究方法を導入することとした。発足して五年余りが経過した今日ではそれなりの成果は得られたように思われる。しかし、その諸成果

のすべてをここに報告する紙面と時間の余裕を持ち合せてはいない。

研究会を発足させると、この夥しい情報量を抱えているため、その収集という段階で、顕在化してきた問題の一つに、未だ本文そのものの研究が充分でないということがあった。本文の基礎的研究が充分成されないまま今日に至っているとすれば、基礎的研究として先ずこの点から手掛けねばならないことが指摘された。

公刊された現存諸本の基礎調査を始めとして、未公刊の現存諸本、記録文献のみに記された幻の書を探索し続けてきたが、已にいくつものものが散佚していることが確認された。しかしそれとは逆に新発見に及んだものもあった。

本稿では、この研究成果の中間報告として、新発見の蓮生寺本・近世写本ながら読法に特色ある大谷大学所蔵の三舟文庫本を紹介するため翻刻し、専精寺旧蔵本の異同を識し、今後の研究に資し、併せて二・三の問題にも触れておくこととした。

(一) 『歎異抄』の諸本について

歎異抄は古来より著者に関する諸説・書名における鈔と抄・本文の構成等をめぐつて極めて問題の多い書物として著名である。例えば本書が鎌倉末期に成立していたことは多くの先学によつて早くから一様に語られていながら、著者については親鸞の弟子唯円と定説化したのは、近代

に入ってからであった。

しかも、現存する最古写本といえ、成立後百五十年位を経て本願寺の蓮如が再発見して書写し、その後本願寺に伝蔵されてきたいわゆる蓮如本まで降らねばならない。それも、蓮如の書写した年代も、禿氏祐祥氏によって指摘された、六十五才頃という推定の域を脱していない。⁽²⁾ その際の底本も不明で手掛りすら得られていない。しかもこの蓮如本は知られている諸本と対校してみると決して善本と称しえないことも、今日では常識となっている。そのため早くから伝本による校合作業も行なわれている。

校合作業は近世宗典研究時代に已に行なわれており、その成果は、本山蔵版本に収斂されていった。西本願寺では明和二年『真宗法要』という双書の一冊に、東本願寺では文化八年『真宗仮名聖教』の一部として板行されたものがそれである。この二者はそれぞれ宗典として定本化されたものであることは周知の通りである。近代に入っては、『真宗聖教全書』所収本を始め、多屋頼俊氏の『歎異抄新註』姫野誠二氏の『歎異抄の語学的解釈』はその代表的なものとなっている。それも、姫野氏の作業に集約されたとみて問題はないと思われる。姫野氏はわずかに『真宗聖教全書』の対校本となった専精寺本を除いたに過ぎない。これは當時已に行方不明になっていた事情によっている。⁽³⁾ これ等の諸校合によってその内容のすべてが紹介された諸本は、

(一) 内所蔵者下の № は『真宗聖教現存目録』所載の通番である。以下本書引用の場合には『現存目録』と略称する。

- ① 蓮如本 (西本願寺蔵 コロタイプ写真版あり № 153)
- ② 端坊旧蔵 永正十六年本 (大谷大学蔵 № 232)
- ③ 端坊旧蔵 別本 (大谷大学蔵 № 233)
- ④ 毫撰寺本 (兵庫県毫撰寺蔵 № 612)
- ⑤ 光徳寺本 (大阪府光徳寺蔵 № 702)
- ⑥ 妙琳坊本 (大阪市妙琳坊本 № 490)
- ⑦ 竜谷大学本 (竜谷大学蔵 № 43)
- ⑧ 専精寺旧蔵本 (某氏蔵 № 1375)

以上の八本である。これに前記の『真宗法要』本・『真宗仮名聖教』本を加えると十本となる。この他に前記の『真宗聖教全書』編纂に先だって昭和の初めに聖教現存調査が行なわれ、その成果は『^{古写}真宗聖教現存目録』として、それに追加資料を加えて昭和五十一年には『^{古写}真宗聖教現存目録』として追刊された。それに従えば、近世以前の写本としては前記の外に、

- ⑨ 常楽寺本 (京都府常楽寺蔵 № 367)
- ⑩ 上宮寺本 (愛知県上宮寺蔵 № 1170)
- ⑪ 真光寺本 (和歌山県真光寺蔵 № 818)
- ⑫ 真光寺本 (和歌山県真光寺蔵 № 819)
- ⑬ 円照寺本 (滋賀県円照寺蔵 № 997)

- ⑭ 実悟抄出本（西本願寺蔵 №136）
 ⑮ 泉福寺本断簡一葉（滋賀県泉福寺本 №864）
 近世の写本として、

⑯ 恵空写本（大谷大学蔵 №276）
 が加えられており、前記諸本と合せて十六本を紹介している。

このなかには、調査後已に事情があつて、散佚したのものも含まれている。⁽⁴⁾しかし、これ以前に存在が確認されておりながら、この調査には含まれないまま、存否不明となったものもある。早い処では、先啓了雅の『大谷遺跡録』巻二に紹介された長野県の西蔵寺の蓮如写本と伝えているものも、山田文昭氏も注意されておりながら、不明のままになってい⁽⁵⁾る。又同氏の調査で存在が確認せられているものに、同じ長野県の康楽寺本がある。⁽⁷⁾これは山田氏の調査記録によつて天正十一年の写本であつたことが知られるが、当研究所がこれを調査した時には已に不明となつていたものである。

その他諸文献に紹介されたものは以下の如くである。

- ⑰ 岸部武利蔵本（奈良県『真宗史料集成』所収聖教目録）
 ⑱ 名願寺旧蔵本（竜谷大学 慶安二写 姫野誠二 その他）
 ⑲ 竜野文庫本（兵庫県竜野図書館正徳五写『国書総目録』紹介）
 ⑳ 恵山写本（大谷大学『円光寺文庫目録』所収）
 ㉑ 恵琳校合本（大谷大学『香月院文庫目録』所収）
 恵琳校合本と称するものは他にも伝存しているらしい

- ㉒ 香月院文庫本（大谷大学『香月院文庫目録』紹介）
 ㉓ 三舟文庫本（大谷大学『三舟文庫貴重図書展観目録』紹介）
 ㉔ 州真光寺本（多屋頼俊著『歎異抄新註』増補紹介）
 ㉕ 日比谷図書館本（昭和四十四年刊『特別買上文庫目録』紹介）
 また当研究所調査で発見したものに次の三本がある。

- ⑳ 蓮生寺本（静岡県蓮生寺蔵 室町末写本）
 ㉑ 安福寺本（岐阜県安福寺蔵 延享五年先啓了雅写本）
 ㉒ 光善寺本（大阪府光善寺蔵 延享頃一支写本）

今仮に㉒まで番号を付けてみたが、このうちには所蔵者がかわつて、二つに数えられているものもある⁽⁸⁾ので一口にこの数字を信用するわけにはいかないが、今後発見される可能性も高いので、増補されることを願ひ併せて正確な数の記せる日を待ちたい。

以上写本を中心として近世までの歎異抄諸本の管見に入つたものすべてについて紹介してきた。処で前記の写本中、近世宗学者の手によつて書写されたものはその大半が校合を目的として書かれたものである。しかし、それらの書写年次は、寛文初年、円智の『歎異抄私記』が刊行された以後に属しているにもかかわらず、刊本の影響は余り受けていないことに注目してみると、各種板本にも相互間の相違がみられ、全く同一の文をもつ底本が発見されていないことなどから、本文研究には、板本といえども写本と同様留意する必要がある。その意味で板本歎異抄五種についても列記しておく。

- (1) 寛文二―五刊 円智 歎異抄私記 上・中・下
- (2) 元禄四 刊 歎異鈔 一冊
- (3) 元禄十四 刊 玄貞 首歎異抄 上・下
- (4) 明和二 刊 歎異鈔(『真宗法要』所収) 一冊
- (5) 文化八 刊 歎異抄(『真宗假名聖教』所収) 一冊

なお、『国書総目録』には『科注歎異鈔』の元禄十四年刊本のあることを伝えているが、首書の誤認かと思われる。

以上歎異抄について近世末までの諸本について概観をしてきたが、他に未刊の歎異抄講録の類が多数存在することが正木大空氏⁽⁴⁾や当研究所等の調査で知られ、中には正木氏の未調査に属するものも数点あるが今回はこの部分の調査は未だ不十分として取上げをしなかつたことを諒承されたい。

今一つ、歎異抄書誌に関する事で、ここに取上げておきたい事は、真宗の聖教として伝来した歎異抄であつてみれば、各種聖教目録及び聖教解題における書誌的記述である。

先ず真宗最古の聖教目録として注目されている存覚述の『浄典目録』には、その片鱗すら記されていないが、永正十七年蓮如の子実悟の編した『聖教目録聞書』には「假名之正教分」として多くの談義本と共に、「歎異抄 一卷」⁽⁵⁾とある。これが初見である。この事については以下に触れる処がある。しかし、この目録全般に云えることながら著者については触れていない。又天正十七年成立の『(高田)代々上人聞書』所

収の聖教目録は著者別にし、親慧・真慧・覚如・存覚の四部に分けて諸書を記録しているがこの中には歎異抄を含んでいない⁽⁶⁾と共にその後も聖教として依用されなかつたようである。

寛永元年性応寺一雄の著わした『真宗正依典籍集』一卷は、先述の存覚『浄典目録』を増補したもので、実悟の『聖教目録聞書』の影響を受けずに成立したものであるが、本書はやがて、後学の指針とされ、後の真宗聖教目録の規範となり、相伝義書の一本にまで指定されたので、本書の与えた影響は大きかつた。この書には、

歎異鈔 一卷(中略)

コレラミナ当流先徳覚如上人ノ御作ナリ云々⁽⁷⁾

と記して、これは著者について記した最初のものとして、後に大きな影響を与えてきた。この後、『真宗法要』開板に際しても歎異抄著者について議論があつて作者未詳の部で加えられることとなつた。

又『歎異抄私記』を著わした円智は著者について触れることをしなかつたが、その弟子恵空は、享保二年『叢林集』附録として『假名聖教目録』を著わし、「嘆異抄・如信上人記⁽⁸⁾」と記して、著者覚如説に対して如信説をたてたのである。以後この説は広く支持せられて、文化八年『真宗假名聖教』編纂時にも歎異抄は如信述として取扱われることとなつた。

これより先、玄智は先述の『真宗法要』に解説を加えて、「歎異抄 一卷 撰者未詳或伝唯円智」と『浄土真宗教典志』(本巻)で、唯円説を仮説とし

てたてており、やがて了祥の唯円説が説示されて、近代に入っては了祥の發揮説として高く評価せられるに至った。以上みてきた如く、目録編輯を通じて著者をめぐる諸説が展開されていったことを指摘しておきたい。

(二) 翻刻諸本解題

蓮如写本の影響の大きいことが改めて知られたので、この翻刻に際しては蓮如本を中心とし、新出の蓮生寺本・三舟文庫本について翻刻することとしたので、以下これ等諸本について、書誌解題と諸本のもっている課題について触れておきたい。

(1) 蓮如写本 本派本願寺所蔵

歎異抄諸本中、蓮如写本は現存最古の写本として知られ、研究の出発点ともなっている。

今日では各種の影印本が世に行なわれており、よく流布しているのので改めて書誌的記載はしない。本書のもつ意義と問題点についてのみ触れておきたい。

今回の調査で明らかとなった一つに、歎異抄流伝過程において本書が諸本に与えた影響の予想外に大きかったことが掲げられる。

その中には、同本からの転写本に出発して、転写を重ねて行くうちに本文の異同を多く生じ、諸本間の親子関係すら指摘出来ない状態に達したものが多い。

こうした情況を生み出す要因として次のようなことが考えられる。歎異抄自身が信仰の重要な指南書であることから、明らかな誤写と認められる個所については、書写にあたって底本や校合本に無関係に訂正してしまう傾向があることを、我々が諸本校合作業中に感じとったと同様に転写する者自身が実際にそうしたことを重ねて行なってきたことが底本を見失う方向に導びいているように思われてならない。

そのために書写の際に起る誤写・脱文・訂記なのか、筆者の良識によるのか異同部分において識別出来ない場合も事実存するのである。又底本に蓮如本及び蓮如本系統以外の異本が用いられた場合、又反対に校合本として蓮如本・蓮如系統本が用いられた例もあるなど、その姿は様々である。このように蓮如本やその系統以外の異本にまで大きな影響を与えてきたことから、現存諸本の大部分がこの影響下で成立していると思えてよいであろう。

又、蓮如本及びその系統諸本の最も顕著な事実とされている流罪記録以下の文辭についても、これまで種々の見解が出されてきたことは周知の事であろう。

一般には流罪記録以下蓮如署名までを一括してこれを裏書と呼んで諸考察が加えられたようであるが、ここでは便宜上次の如く三分割して考えておきたい。といって、それが個々独立して存在したといっているのではなく、蓮如本から諸本が転写されていくうちに三部分と考えられてきたと思われる場合が存在したからである。

(イ) 流罪記録

(ロ) 識語（以下識語とはこの部分のみをいう）

右斯聖教者為當流大事聖教也

於無宿善機無左右不可許之者也

(ハ) 署名

釋蓮如（花押）

とこのように三部に分けて考えていきたい。このことは転写本の系統を細分化して行くとき何かと都合がよいように思われたからである。巻末について云えば、底本に蓮如本系統を用いた場合でも、(イ)(ロ)(ハ)のすべてにわたって記す場合が、常套手段であるはずなのに、安福寺本や三舟文庫本の如き、(ロ)(ハ)のみを記すもの、光善寺本のように、(ロ)のみ記すもの、蓮如本の影響下で成立したものとみてよい。極端な場合には、(イ)(ロ)(ハ)のすべてを除く場合でも或は蓮如本もしくはその系統本からの転写本という可能性が全くないといえないので、本文精査のうえ取扱いに充分注意したい。

又(ロ)について附言しておくならば、これまで先学によって歎異抄の非公開性のみが指摘されてきたが、次の語はこれとは反対に公開性を重視する言句であり、しかも、蓮如自身の言葉として伝えられているものである。これまで殆んど注意されていなかったのここに紹介しておく。

聖教をわたくしにいづれをも、かくべきやうにおもへり、機をまもらりてゆるすことなり。世間仏法共に総じてゆるさぬことある也。

（中略）聖教をおしむは、よくひろめんがため也。

とあり、必ずしも、これまで言われてきたような非公開的なものにしていただけではなく、むしろ、この言葉に従えば、積極的に本書が公開されて行くことを願う蓮如の姿が浮んで来るのである。それを裏付けるかのように、先きに紹介した如く、多くの歎異抄の転写流布がなされていた実態を見逃してはならない。又蓮如自身に則してこれをみて行くならば、先ず『五帖御文』の第一通⁽⁴⁾や、『空善聞書』にみえる「親鸞は弟子一人ももたず」という言葉に注意したい。この言葉は覚如の『口伝抄』や『改邪抄』にもみえており、必ずしも歎異抄そのものに依ったとは言いが、後に詳述するが如く、歎異抄第十二条のうち「仏説に信傍あるべき由」の一段を、蓮如の門弟への教化讃談の一齣として伝えていることを合せ考えるならば、「弟子一人ももたず」の典故に歎異抄を引当ててみることも可能であろう。このように考えなおしてみた時、蓮如の門弟教化の中心が『御文』であったことからすれば、当時こころした御文も普及していたので、歎異抄思想の普及という点からは無視出来ないものとなるであろう。

この事は、蓮如と歎異抄の出合いの時期や蓮如本の書写年次の推定にもかわりあって来る問題ともなるであろう。ちなみに『五帖御文』第一通が記されたのは文明三年七月十五日のことであり、この時蓮如は江州から越前吉崎へ居を移して間もない頃のことである。時に蓮如五十七才であった。

(2) 専精寺旧蔵本

ここに旧蔵としたのは現在某氏蔵となっているためである。本文は已に『真宗聖教全書』の対校本として紹介済みではあるが、永正十三年写本の転写本として歎異抄研究には欠くことの出来ない一本であるにもかかわらず、天正十三年本として誤植されたため真価を問われずに来たものである。それ故、改めて翻刻し、真価を問う手掛りとなればと願ったことである。

本書は、已に昭和十四年『宗学院論輯』二十九輯の附録「古本真宗聖教現存目録」に№一三七五として紹介されているのでここに再録しておきたい。

- ① 永年(つと)十三年 了宗 (写刊年代筆者)
- ② 袋綴 淡墨地紙表紙 (装釘表紙)
- ③ 縦二四・五糎 横一七・五糎 (寸法)
- ④ 三三 (紙数)
- ⑤ 六行 一五字内外 (半葉行数一行字数)
- ⑥ ナシ (外題)
- ⑦ 歎異鈔 (首題)
- ⑧ ナシ (⑧ 撰号) (⑨ 尾題)
- ⑩ 振仮名処々アリ (転 声 (訓點左訓・振仮名等))
- ⑪ 永正十三年三月十二日末尅書写之已(つと)丁(つと)

釈了宗

同右筆

一 入道

五十三歳 (奥書刊記)

⑩ 後印ナシ 奥書ノ次ニ「濃州垂井専精寺之察」トアリ (備考)

又、その翌十五年には真宗『聖教全書』(以下真聖) (全と略務) 第二卷宗祖部に対校本として用いられてきたので、その存在も内容も充分に紹介されていた。

しかし、この両者の紹介記事のうちに、本書の評価を左右するほど重要な書写年次について、後者は致命的といえる誤りを犯してきたのである。即ち前者では正しく永正十三年と紹介してきたにもかかわらず、後者において、天正十三と誤って紹介して以来、数十年の間この誤りに気付くこともなく、天正十三年本として一般に解されてきた。当研究班でも両者の間の齟齬することには早くから気付いていたが、何分にも両者共に学界での信頼度が極めて高いために、性急な結論を出すことも出来ず、この何れが正しいかは、その原本に接しない限り解決出来ない問題であるとの考えに至った。しかし、すでに原本は行方不明との消息が伝えられ、半ば諦めかけていた。

処が、昭和五十年に茨城県歴史館で開催された「中世茨城の仏教と文化」展の目録の№36に永正十三年写本、大谷大学図書館(蔵)として紹介されているのが気が付き驚いたことであった。しかし、これは永正十六年端坊本の誤りであることをその後大谷大学図書館で確かめることが出来た。そこでまた振出しに戻ってしまった。幸運にもつい最近、西本

願寺にそのフィルムが所蔵されていることを知り、調査の機会を与えられた。そこで先ず問題となる奥書部分を示してみよう。

永正拾叁年三月十二日未、尅書寫之早、

釋了宗同右筆一入道

(右同筆)

濃州垂井專精寺玄察

(筆者傍点)

今一度、本書の存在を最初に紹介した『現存目録』の関係部分と比較してみると次の事実が判明してきたのである。

書写年次について『現存目録』では永年¹³十三年とするが『現存目録』の奥書部分の正しいことが明らかとなったので、「年」は「正」の單純ミスである。と同時にそれは『真聖全』の天正十三年も「天」は「永」の誤りであることの証明にもなった。又奥書と最後の專精寺玄察の文字との筆蹟について検討を加えた結果、同本は永正十三年了宗の自筆本ではなく、玄察の筆蹟と認められた。

又『現存目録』では、この玄察の「玄」が「之」と誤って記されており、專精寺に問合せたところ、之察という人はいないが、玄察ならば、同寺十五世にあり、享保十二年八月廿四日没した人であることも御教示によって明らかとなった。それで本書は永正十三年了宗写本を江戸中期に至って、垂井專精寺玄察が転写したものであるとの結論を得たことである。初めより本文十三条前半まで、行間、上下欄外に著しい注釈が玄察の手で加えられていることも、室町古写本には殆んどあり得ないことであり、これで納得出来たように思われる。

以上の事柄が判明してみると新しい問題が起ってくる。その一つは玄察の書写底本であるところの、永正十三年了宗写本は近世中頃まで伝存していたと考えられるので、永正十三年了宗自筆の写本を捜し求める必要が出てきたことである。

又、了宗という人物はどのような人物であったのか、又永正十三年書写の底本を玄察が何処で見つけていたであろうか。この一つの手掛りが、本書のもつ特異な存在にあるように思われてならない。何故ならば、本文を今回の調査と『真聖全』の脚注から復元して検討を加えてみると、注目すべきことは(資料篇参照)蓮如本系の特色とする流罪記録以下の何れも含まないというばかりか、歎異抄の原構成を考える時の重大な手掛りとされている巻尾の「右条々は、みなもて信心のことなるより……目やすにして、この書にそえまひらせてさふらうなり」までの部分が無い。これは誤脱と考えるには余りにも大きすぎる。その上これに続く「聖人のつねのおほせには……歎異抄といふへし外見あるへからず」までを一条独立させて、計十九条としている点、他に類をみないものであることが再確認されたのである。しかも、底本との本文校合の跡は随処に窺われるが、これは他の異本との対校の跡ではないことも蓮如本等との対校の結果知られたのである。それ故、永正十三年本の底本までも、蓮如本或は蓮如本系とは無関係の存在であることが推定されるに至った。こうした事実は、たんなる異本が存在するということだけで済まされる問題でないように思う。

書写された年次が、蓮如写本と余り隔たっていないことから歎異抄そのものの成立過程をみる上で今後留意されねばならない一本であることに大きな意義を見出した次第である。

このように永正十三年了宗写本の転写本であってみれば、書写年次こそ降るが、伝えている年次は、これまで年号をもつ最古写本の端坊旧藏永正十六年写本にも匹敵する善本として重視されてよいこととなる。その原本が発見されるようなことになれば、当然本書を以って、有年写本中最古のものとなることは言をまたない。

了宗について考えをめぐらしてみれば、飛騨牧ヶ野の唯乗坊了宗が先ず注目されよう。この了宗については、岡崎勝髪寺藏照蓮寺文書中に永正十年五月廿九日付の自筆書状一通が見出され、寛文三年の同書状押紙によってこれが牧ヶ野唯乗坊了宗であることが知られる。この唯乗坊の人となりについては『岷江記』卷二の記す如く、赤尾道宗・檀谷寺善宗等と共に蓮如に帰依してきたという。

已に道宗・善宗に聖教伝持の事実が認められる以上、了宗にもそのような事実関係があったとしても不思議ではない。この歎異抄を書写伝持してきた了宗と同一人物とすれば、三人共に聖教流伝史上極めて重要な存在と認めねばならないであろう。しかも、この三人は共に法名の下一字が共通して宗の字が与えられていることをみる時、この三人の交遊の深きことを物語っているようにも思われる。しかし、当時了宗と名乗る真宗門徒は多くあったと思われ、現に大阪三番の定専坊の住持にも大永

四年実如寿像を賜わった了宗がいる。又竜谷大学図書館に蔵せられている室町末期の『選撰集』延書写本六卷三冊の各卷末にも「釈了宗」「釈了宗所持」「釈了宗主」とみえており、歎異抄を書写してきた人物としては何れも、これにふさわしいのであり速断は許されないが、牧ヶ野唯乗坊了宗である可能性は高いとしてよいであろう。

もしこれが了宗とすれば、蓮如と交流をもちながら、了宗は蓮如本とは無関係な異本を知っていたこととなり、これが実証されれば歎異抄流伝史上、一大発見となるであろう。この專精寺旧藏本の了宗の名の下に先述の如く五十三才の年令が示されている。しかし、この年令が、書式からは必ずしも了宗の年令と解することも出来かねるが、もし了宗のそれとすれば、逆算して寛正五年の誕生ということになるであろう。牧ヶ野道場はその後発展して大野郡莊川村寺河戸の遊浄寺となったことが知られ、同寺の住持の話では、寺河戸に永禄九年に移る以前同村内一色にあり、そこには今も同寺の道場跡があり、その地が牧ヶ野と呼ばれていたと伝えている。当地方の中心寺院中野照蓮寺も目耳の間にあり、永正十三年本がこの地方で発見される可能性も出てきたように思われる。本書の再発見は、今後の歎異抄研究に大きな波紋を投げかけること必至である。

今回本書の翻刻は全文を予定していたが、故あってそれが不可能なので、今回は蓮如本との異同のみの部分的翻刻となり文察の書き入れは全く無視したが、完全翻刻の実現出来る日を待ちたいと願うものである。

(3) 蓮生寺本 静岡県蓮生寺所蔵

本書は、蓮如本の転写本であることは、蓮如本のところで触れたように巻末の(イ)(ロ)のすべてを備え、(ロ)の書出しの右肩に「本云」の文字を添え、(イ)の「釋蓮如」のみで原本の花押について「御判」等の説明をしていないことから知られよう。この部分のみでは妙琳坊本も全く一致している。

本書を詳しく紹介するのはこれが最初である。本書の存在を知ったのは、先年同朋舎より西本願寺蔵の蓮如本複製の際、故宮崎円遵氏が、書誌解題²³⁾の中でこれを紹介されたことが契機となったものである。

宮崎氏はこの中で、静岡県蓮生寺にも室町中末期の一本のあることを記しておられ、本書の解題には触れておられない。ここに云う蓮生寺は、現在藤枝市にあって熊谷蓮生房を開基とする大谷派の由緒ある寺である。

しかし、この蓮生寺本が、当初より同寺に伝えられていたものかどうかは明らかでない。

蓮生寺の由緒書・縁起類は早くから世に行なわれていながら、古いそれ等には、この歎異抄について何一つ紹介していない。わずかに昭和五十年発行の縁起に初めて、蓮如上人筆として紹介に及んだのが初見である。同寺の所蔵に至ったのは、こうした事情からみて、比較的新しい事のようにあるが、その経緯も知ることが出来ない。

本書の存在を知った当研究所では、去る五十六年五月現地調査を行な

い、全冊写真収録を終えた。同年八月には同朋大学を会場に日本印度学仏教学会が開催された。これを機会に特別展示をして学界にも紹介することとなった。

今、本書が、分量にして全体の三分の一にすぎない残欠本にもかかわらず、その全容を紹介することとしたのは、他でもなく、新出資料であること、又本文の末尾流罪記録や識語・署名に至るまで完備しており、蓮如自写本のある時期における姿を伝え、いくつかの示唆を与えること必至と考えたからである。これ等の点に留意しつつ、残欠部分全文を翻刻することとしたのである。

順序として、先ず書誌的紹介をしておきたい。

現在は台紙張込み袋綴となっているが、かつての原初形態は粘葉綴であったことは糊付部の上方の丁付を追っていくと誤記が認められるが粘葉綴の丁付、例えば一ノ初イ・一ノ初ロ・二ノニ・二ノホ・二ノへと続いていることからそれを窺い知られよう。料紙は鳥子堅紙で艶のあるものを用い、書体や行格からいっても、室町末期を降るとは考えられない。

他に本紙右肩にもう一箇所と、糊付部下方に一箇所、しかもこれは本紙が破損している場合には台紙部分に別の丁付があって、現在に至るまで四回の改装を経ていることも知られる。最終の四回目には現存する部分のみを粘葉一葉分を二面一紙に割裂いて順次張込んでいったため、旧来の丁付の位置が交互に位置を変えてみて、中には一葉のうち、表の一面のみであったり、裏の一面のみであったりする場合もある。割裂き部

分は本来二面共に残らねばならないはずであるから、こうした部分の欠損のあるのは改装の際失なわれたものと考えられる。その結果一見不規則な製本の如くにみえるのも前記事情より察すれば無理からぬであろう。現存する部分で観察すれば虫害は殆んどなく、わずかに糊付部分の鼠害がみられるものの墨付本文には全く影響のないものである。

張込みに当って、本紙は一度水洗いされて、本文の墨を一部洗い落してしまっており、判読すら出来ない部分も多く、この点残念でならない。その際、天地切込みも行なわれたらしく、張込み原紙の寸法が様々で、原初時の料紙寸法は不明である。

一応台紙共寸法をみておけば、縦二四・二糎、横一七・二糎となっており、原紙の第一紙についていえば、縦二三・二糎、横一四・四糎となり、現存する本紙墨付四十七面(割製)分である。行格は一面五行十七字内外となっているので、真宗聖教転写の規矩を正しく守っていることが知られる。この分量は全体の三分の一位となるが、次に本文の上でこの残存状況をみておきたい。

序文・第一条は完全に残っているのであるが、第二条の途中「法然聖人ニスカサレマヒラ」までと、十四条後半、以後、流罪記録・識語・蓮如署名に至るまで、途中七個所の欠落部分があるが、大半はよく残っている。その詳細は翻刻本文に譲る。ここに欠落する一面とみられるものが最初に紹介した『現存目録』№864の断簡一葉である。すなわち、滋賀県堅田の泉福寺所蔵の歎異抄断簡一葉は、存否不明との返事があって未

確認となっているが、一面の行格や寸法・内容量・推定年代も一致し、この蓮生寺本の一部である可能性が高い。それ故、同寺からの吉報を待ちたい。

又本書の伝来について憶測を逞うするならば、かつて存在したことが知られておりながら行方不明になっているものの一本に前述した如く、長野県長沼西厳寺本がある。この蓮生寺本がその西厳寺本である可能性もあるようである。

というのは、江戸中期の真宗史学者、先啓了雅の編纂した、『大谷遺跡録』西願寺の条に蓮如上人筆の歎異抄一巻のあったことを記している。昭和の初めに山田文昭氏が、その後多くの先学が同寺を訪い、今次の研究所の調査でも、その歎異抄は発見出来なかった。しかも西厳寺本が蓮如筆と伝えている処からすると、(1)(2)の末尾全文の完備していた可能性があり、蓮生寺本に「釋蓮如」とのみあることもかわりありであらう。

本文は残されている部分での対校であるので問題は残るが、端坊永正十六年写本と同様、蓮如自筆写本の本文と脇書を残しているものでは大半脇書を依用していることは、蓮如自筆の脇書が重要なものと解することを示していると考えられる。又本文末尾から流罪記録に移るのに端坊永正十六年本は半葉をあげ、蓮生寺本は同葉のうち本文二行目で終わらずかに行空白とし次に二行を収めていることは、蓮如自筆本が、本文末尾部分半葉に三行を収めて以下余白とし、次に白紙二葉分を加えて

流罪の記事を書き始めていることを深くかかわりあっていることが考えられる。というのは端坊永正十六年本が余白半葉をもっていることは、蓮如自筆本の余白を意識して、余白をもったことが考えられ、蓮生寺本の余白の取り方は、端坊永正十六年本の配慮とは明らかに意識を異にしていると考えてよいではないか。ここに蓮如本の原態を考える手懸りが得られるように思われてはならない。

(4) 三舟文庫本 大谷大学所蔵

本書は近世中頃の写本であるため、これまで全く研究対象とされていなかったものである。故大谷大学教授舟橋水哉氏のコレクションの一本で、大谷大学へ寄贈されてまもなく、一度だけ展観の陽の目をみたが、その時の解説書によれば、「開版の写本にして筆者は不詳」ということであった。この判断は、刊本の『首書歎異抄』のみにもみられるのと同じ個所、すなわち、表紙の書き題箋に「歎異鈔本末」とし、現に十二条終と十三条初との間に「本終 末初」とあって、本末二巻に分けていたものを底本に使用していたことからそのような判断が単純に下されたものである。しかし、子細に検討を加えてみると、後半に顕著となってくる随処の脱文の大半が一致することからも、それは云えそうであるが、完全な一致はみられない。この点で本書は開版本の写本とするには問題が残るであろう。以下に述べる表記法に留意すれば開版本の写本でないとの結論に達せざるを得ないであろう。本文について云えば、漢字部分に振仮名は少ないが、他に類例をみない捨て仮名という表記法を用いて

いる点注目される。書写当時の人が、本文をどのように読んでいたかを教えてくれ、今後本文研究にも示唆する処多いことであろう。本文の転写という点では忠実な写本とはいえないが、捨て仮名と送り仮名を区別して用いている。例えば「道ヲ問ヒキカンカタメナリ」というようにである。又本文脱字に対する追補文字も、それ等と区別して「未_レ生_レサル」の如く用い、又漢字の「力」は仮名の「カ」と見誤らないため、漢字の「力」を「刀」の字をもって代用するなど細いところまで配慮しての書写姿勢を全巻にわたって至る処にみることが出来る。そのような繊細な心の持主であってみれば、後半に顕著となってくる、文章・語句・文字の脱落も重出文言に起因する誤写と考えられる場合多く、不自然な現象であり問題も残る処であろう。その意味では善本でもなく、歎異抄の写本中では古写本にも属さない。本書は墨付二六丁、美濃版、半葉、九行、一行の字詰は不統一で、多い処は二二字、少ない処は十五字前後にもなっている。本文について云えば、十二丁右の七行目の所に、

ヲト云 本終 末初

とあって本末二巻分巻本を底本としたこと、又、その部分が十二条と十三条の間ということまで『首書歎異抄』と共通している。更に巻末では流罪の記録はない、識語に続いて、蓮如署名部分は「釋蓮如御判」までは一致するが、巻頭の序や尾題は残っていない。文字について両者を比較してみると、漢字は仮名に改め、仮名が漢字に改められている例は極めて多く、「オ」と「ヲ」、「へ」と「エ」、「エ」の区別は少なく、

「尸」の如き合字や、「示」(楽)、「忝」(煩)、「休」(候)等の異体文字を多く使用しているなど『首書歎異抄』を底本としているならば、極めて不誠実な写本としなければならないであろう。この点翻刻には問題があるが、捨仮名表記法に大きな特色があるのでここにあって翻刻することとしたのである。

(三) 歎異抄流伝考

以下翻刻する以外の諸本を縁として、その背景にある諸問題のうち流伝を中心に考えておきたい。

(1) 永正十六年本とその周辺

本書は、端坊旧蔵聖教群の一つをなし、同じ聖教群の内にもう一本歎異抄の写本を含んでおり、しかも、両者の間に親子関係が成立するのではなく、異本収集の一例と考えられる。そのことは和歌山の真光寺蔵本についても、二本が蔵せられ、この写本が書かれた頃は和泉国にあったことは底本研究に重要な条件となるが、これまで余り注意せられていない。現地に移るのは寛永二年のことである。本書も端坊と同様異本関係にあることは周知の事実である。同時代の数多くの聖教を伝持してきた地方寺院の調査を行なっている時、同種の聖教二部所蔵していることについて、注意深く観察を加えてみると、その中に上述の如き関係にあるものと、転写のための底本を、その後手拵本としてそのまま伝持している場

合等に遭遇することがしばしばである。こうした事例では、一群の聖教群として研究を進めてみるにより、聖教転写の状況をかなり復原出来そうである。

『現存目録』により、端坊旧蔵の聖教群がどのようなものであったかおよその実態は知られる。しかしここでは本題でないのでその詳細は省くが、それによれば二十五部の聖教を伝持してきたことが確かめられ、その大半が書写年次を室町末期と推定している。そのうち、永正十六年の年次をもつ写本が、この歎異抄の他に『歩船鈔』二冊がある。しかも『歎異抄』と同様、本末二巻のうち、本巻の最後の紙の糊代部分は「永正十六年^卯五月五日」と書写完了の日付らしきものが記されている。このような年記法は、他にも兵庫県亀山の本徳寺に三河の本宗寺住持で本徳寺を兼務、本願寺の後見役をも仰せつかった実田の書写聖教二点知られる。『現存目録』でいえば、№1035の『真宗用意』と、№1036の『唯信鈔議』で共に永正九、一〇年とあり、和歌山真光寺の『存覚法語』は、「永正十六年十月廿六日乘賢」(『現存目録』№823)端坊の歎異抄・『歩船鈔』と殆んど同時代であることにも注意しておく必要がある。

端坊は文明十三年仏光寺より本願寺へ転派し、以後の寺歴をみる時、本願寺と密接な関係にあったことが知られており、『天文日記』の天文八年四月三日の条に「端坊明誓七回忌之志明了調之也」とみえている。明誓がこの歎異抄書写年代に合致してくるようである。次の明了代となれば聖教書写の際その名を明記しているので恐らく前任明誓の時と考え

て大過あるまい。ちなみに明了の袖書のある聖教に『最要鈔』、『破邪顯正鈔』、『顯名鈔』があり、明了より四代後の秋の端坊を開いた明善の袖書をもつものに『口伝鈔』がある。このように考証の得られるものは極めて稀な例とはいえ、聖教書写の実年代の推定出来る点注目してよい。聖教を伝持してきた各々の寺院の寺歴を明らかにして行く中で、今後このような問題は一層明白になってくるであろう。この端坊永正本の書写された翌十七年には、蓮如の子実悟が『聖教目録聞書』を残しているが、これは聖教目録に歎異抄が取上げてきたことは先述の通りである。先の専精寺旧藏永正十三年本と合せて、これで、歎異抄について永正期における史徴が三つ揃うことになった。これによって当時の歎異抄の具体的在り方の一端を知ることが出来る。

又端坊も、真光寺も蓮如時代転派して本願寺門徒化していることは、その他の転派寺院と共に転派後も教義上問題が残り、このような聖教を必要としたことも考えておく必要がある。

(2) 実悟と歎異抄

本書は『現存目録』№136や多屋頼俊氏の『新註』で紹介されており周知のものである。

多屋氏の研究によれば、抄出本ながら、「天正七年二月十日書之 桑門 實悟」と奥書があるという。内容を検討してみると、蓮如写本や永正十六年端坊本に近いが、細部においては一致しない部分もある。又、最後の十八条の一部分を引用してはいるが、それに続く巻末流罪記録以

下はないという。

この歎異抄は、抄出部分というのは多屋氏の調査によれば、第三・五・九・十三・十四・十六・十七・十八の八ヶ条の全文又はその一部分を引用しているが、以下に詳記する第十二条については実悟抄出本では所引されていないことに注意しておく必要がある。

ここで、実悟と歎異抄との深い関わりあいのあったことについて触れておきたい。

実悟は明応元年、歎異抄の最古写本を残した蓮如の子として誕生した。天正十一年九十二才でこの世を去っている。その間、歎異抄と関わりがあったのは次の三点であり、終始六十年にも及んでいる。

第一には、彼の二十九才・永正十七年自ら編輯した『聖教目録聞書』「歎異抄 一卷」として収載していることである。

この『聖教目録聞書』は長い間、越中城端善徳寺に埋れていたもので大正十二年山上正尊氏によって発見されるまで、その存在すら知られていなかったことは、存覚の『淨典目録』が、後世の真宗聖教研究の出発点とし、聖教目録編輯に多大な影響を与えてきたことを考える時、たとえ歎異抄が最初に取上げられた目録であるとしても、余り重視すべきではないかも知れない。しかし、これを、実悟の編であることを考えてみる時、又当時における歎異抄流布の状況を併せ考えてみる時、その意義は高く評価されなおしてよいであろう。

専精寺旧藏本が永正十三年本の面影を伝えていることが知られたこと

と、端坊旧蔵永正十六年本と併せて、永正期の歎異抄について考える史料が三点揃ったことになり、今後の歎異抄研究の一つの方向性が与えられたものと考えてよい。

第二点は、実悟が父蓮如の語録を兄蓮悟の手を借りていくつか編輯していたことが知られているが、そのうちの一つに成立年次不明の『蓮如上人一語記』⁽⁴⁷⁾というものがある。その第八十七条に歎異抄第十二章の一部分を出典明記の上引用している。この『蓮如上人一語記』は北西弘氏の所説⁽³⁹⁾に従えば、後の加賀で起った享祿の錯乱で失なわれたものであるが、焼失以前に書写して行なわれていたものがあつたらしく、近世の転写本ながら本文は伝存していることが判っている。又実悟自身は享祿錯乱以前に書写した一本を或人から借用して、更に別の法語集一本を晩年の天正二年編輯しなおして新に『蓮如上人仰条々』と命名し、この第七條にも、前記の十二條の一部分を収録している。しかし、収録した本文は歎異抄の本文と比較してみると、蓮如本の歎異抄でこの部分に相当する処を示すと、

故聖人ノオホセニハ コノ法ヲハ 信スル衆生モアリ ソシル衆生モアルヘシト 佛トキオカセタマヒタル⁽⁴⁸⁾

とあるのに対して『蓮如上人一語記』⁽⁴⁷⁾の文でそれを示してみると、

仏説ニ信謗アルヘキヨシ トキヲキ玉ヘリ 信スル者ハカリニテ 謗ル人ナクハ説キオキ玉フコト イカ、トモ思ヘキニ ハヤ 謗スルモノアル上ハ 信センニ於テハ 必往生決定トノ仰候 歎異抄ニ

有⁽³⁹⁾

又『蓮如上人仰条々』第十七条ではこの部分を次のように記している。

仏説ニ信謗アルヘキ由説ヲキ、玉ヘリ 信スル者ハカリニテ 謗ルナクハトキヲキ給フ事 イカ、トモ思フヘキニ ハヤ謗スルモノ有ウヘ信センニヲヒテハ必ス往生決定トノ仰セナリ 歎異抄見歎⁽⁴⁹⁾

といい、後の二書が歎異抄本文の取意抄出であることは歴然としており、後二書の間でも、原態は同文であつたと思われるが、転写を重ねて行くうちに両者の間にこれ程の相違点を生ずるに至つたものであることが推測せられる。

しかし、この法語は蓮如の口から真接実悟が聞いたというものではなく、兄蓮悟を通じて語り伝えられたと考えられるので、蓮如自身の歎異抄理解をそのまま伝えていたとは考え難いが、これに近いものであつたことは確かであろう。というのは、父蓮如が没した時、実悟は八才に達したところである。しかも、生後まもなく二十五才年上の兄蓮悟に引きとられ、京都を離れ、兄の住坊加賀二侯の本泉寺や、清沢坊に過してきたそれも享祿の錯乱で焼失、その後、流偶の生活が始まり本願寺から勘氣を蒙るなど苦しい生活が続くが、五十九才の天文十九年その勘氣も赦されて上京するまで北国の地にあつたのである。その間蓮悟と共に生活していたが、その蓮悟も、これより先、天文十二年七十七才でこの世を去つていた。その後の実悟は晩年河内門間に安住の地を得たことであつた。

又この「仏説ニ信謗アルヘキヨシ」の一条に関して、長野県康楽寺に所蔵する『聞信義集』一卷も、この歎異抄十二条の当時における理解を助けるものとして忘れてはならないものである。

第三には、晩年八十八才の天正七年歎異抄八ヶ条、『末灯抄』二条を抜書した事実があり、その自筆本が、上記に掲げた、実悟写本歎異抄という一本である。

加賀にあった頃でも実悟は京都山科本願寺への上落も再々であった。しかも、永正十三年三月二十五才の実悟は、真宗の奥義ともいふべき、『教行信証』やその註疏の『六要鈔』を本願寺の坊官、慶聞坊竜玄より伝受され、又生涯において多くの真宗聖教を書写するなど、聖教について学ぶことも多々あったことは否定出来ない。聖教に親しんできた実悟ではあったが、このように室町中・末期に一人の人物が、歎異抄という聖教に、多角的に関わってきたことは注目に価するであろう。

(3) 常楽寺本について

京都常楽寺に所蔵されるもので、已に『現存目録』№367や、山田文昭氏の『真宗史之研究』所収「採訪史料」に紹介され知られているが、何か、歎異抄研究者の間では殆んど話題に上っていないもので、多屋頼俊、姫野誠二の両氏さえもこれに触れていないのである。

本書が室町中期の写本で異論ないものとすれば、同寺の聖教群形成に大きな役割を果たしてきた人に蓮如の叔父空覚がいる。このことは(1)に紹介した蓮如本の底本を考える時無視出来ないにもかかわらず、今日ま

で、本書は不問とされてきたのである。山田文昭氏の見解に従えば、本書は、「外見アルヘカラス」で終わっているといえは流罪記録以下の無い系統に属し、専精寺旧蔵本との関係も知りたくなってくる。しかし未調査となっているため、他の同系諸本との関係についても不明といわざるを得ない。

(4) 上宮寺本について

今日所在不明となっている本書は岡崎市佐々木上宮寺に伝わっていたもので、『現存目録』№1170に紹介されている。しかし、現住の話では寺内で所在不明となっており、そのため本文の検討は出来なかった。『現存目録』の紹介によれば、室町中期の写本とし、本文は第五章までの残欠本とのことである。端坊と同様同寺にも一群の古写聖教があり、寺歴と合せて考察を進めてみると、蓮如の弟子如光か或は如光の門弟の手になったものと考えられる。それを傍証するかのように如光の門弟で聖教書写をしてきた事実の知られている者に兆従がいる。又上宮寺末寺群の实地調査を行なってみると、高取専修坊(高取市)は已に『現存目録』によって知られる処であるが、近年当研究所の調査で、良質の室町中末期の聖教群を所蔵することが確認されたものに、祐金の専福寺(岡崎市)がある。又上宮寺の近くには末寺ではないが舩越の願照寺(岡崎市)があり同寺には先に触れる処のあった兆従筆の『諸神本懐集』下巻があり、上宮寺との関係も深きことを推測されよう。このように地理的に近くにあり、遠く離れていても本末関係で結ばれている諸寺に伝蔵されてい

る聖教群は勿論、後者の場合たとえ一点であっても、このような諸関係が背景にあった場合が多く、今後のこのような調査に当ってはこうした視点にも留意する必要があるであろう。

(5) 康楽寺本について

研究所が現地調査を行なった処現在本書は存否不明で、散佚したのは比較的新しく、故山田文昭氏の調査以後のことで、再現する可能性もあり、その時の手懸りともなればと思ひ、又当時の歎異抄流布の状況を窺うのに重要と考えられるのでここに別項として取扱うこととした。本書は、歎異抄写本中室町末期の書写年次、筆者の知れるものとして先ず注目したい。本書の存在したことは歎異抄研究家の間でも殆んど知られていないもので、わずかに山田文昭氏一人がこれを紹介したのみである。

その紹介によれば、奥書は、

天正十一^{癸未}十一月朔日 来與書之

康楽寺 常住^如

とあったという。又同寺には他にも来与の書写した聖教のあったことが氏の報告で知られている。即ち、

三經不審鈔 一帖 天正十一・九・十二

口伝鈔 上 一帖 天正十一・十・十八

真宗明文鈔 一帖 天正十一・十・晦

がそれである。山田氏の報告にないもので、他にもあったことが、『室町時代物語集成』第九の刊行によって追加出来た。それは、『為盛発心

因縁集』という談義本の一つである。その解題によれば天正十一年十一月三日の書写奥書をもっており、口絵にその巻頭一葉の写真が載せられている。そのことから、歎異抄を含めて、同寺より流出した書写聖教が他にもあって、その中にもこの来与なる人物の書写奥書をもつものが、いくつか存在することが予測されるであろう。

昭和五十二年八月の研究所の実地調査では、この来与の奥書聖教は一点も確認出来なかったが、山田氏の報告されたもの以外の聖教として、『存覚法語』や『浄土真要鈔』も見出されているので精査を加えれば、その他の聖教もなお同寺に現存している可能性もある。

又同寺に現存する聖教で奥書の無いものでも、前記口絵写真の来与の筆蹟からそれと知られるので、この筆蹟と現存するいくつかの聖教の筆蹟と比較してみると、なおいくつかの来与の筆蹟と考えられるものがある。

人によって書写の速度にかなりの差異は認めねばならないが、この来与の場合、前述の如き奥書を事実として認めるならば、集中的にかなり早い速度で、これ等の聖教を転写していたことが知られる。歎異抄の場合、前日に『真宗明文鈔』を書写している事実があるので一日でこれだけの本文を書写していることになる。中一日おいて続いて『為盛発心因縁集』を、十一月三日に書写しており、この頃、一人の人間が書写に費やした時間が知られ、その成果の実態をも窺わせるものとして注目し値しよう。

この来与と云う人物は同寺の住職ではないが、こうした寺には、他にも寺に住しながら勉学に励んできた者もいたことを示すもので、当時の真宗寺院の在り方を窺うに足るものといえよう。聖教書写が学問の資とされてきた一例として注意しておきたい。

康楽寺には別に歎異抄享受史上極めて重要な存在となっている談義本『聞信義集』が現存していることは先述の如くであるが、この康楽寺本歎異抄は天正十一年の奥書のあったことから、この時期の流伝状況を知り得る上で欠くことの出来ない一本である。

又この頃康楽寺は先きに紹介した三河の佐々木上宮寺本をもつ上宮寺とも、三河一向一揆や、長嶋一揆を通じて交流のあったことが知られている。時の上宮寺勝祐・信祐は共に康楽寺に身を寄せていたし、信祐の子尊祐の室を康楽寺より迎えたこと、寺史の『古今纂補鈔』は語っている。両者の交流の中で共に歎異抄と深いかかわりをもっていたことは、注目されてよいと考える。

(6) 新出安福寺本・光善寺本について

安福寺本は奥書に、

維時延享第五龍飛集戊辰夏六月上旬第三天書寫之竟

西濃釋先啓

とありその書写年次が知られる。先啓の住した安福寺には先啓の収集した多くの真宗聖教と共にこの一冊が加えられている。彼は他に『浄土真宗聖教目録』や『安心相承聖教目録』⁴⁴⁾を著わし、他の著述と共に出版

してきた程で、目録と聖教の関係が明白に知り得る点注目される。又親鸞の旧跡を自ら歩み訪しての成果であり、先述した如く長野県の西蔵寺にある蓮如本を紹介したのは彼であった。寛保元年に成った『浄土真宗聖教目録』では、

第二祖如信上人御作

善巧撰化集 一卷

歎異抄 一卷 分爲三卷二曰
寛如上人撰。

と記して恵空以来の伝統を継承していたことが知られる。本書も流罪記録はないが、(四)を残す蓮如本系統本であることも研究所調査で確認している。

次に光善寺本⁴⁵⁾についてであるが、本書は筆者の自身の奥書はないが、同寺に所蔵する安政三年達玄編の『天印黒塗書物箱管入目録』に、「歎異抄 一支筆 一卷」とあり、同寺蔵の他の一支写本と同筆であることも一見してわかる写本である。一支は延享三年⁴⁶⁾に歿しているので、これ以前の写本であることは云うまでもない。この光善寺は出口の光善寺で蓮如と最も関りの深い寺であり、准玄を輩出して以来真宗教学の相承寺としてこの界で最高の地位を保ち続けてきたことは周知の通りである。一支は同寺第十世として多くの聖教を書写・注釈書を体系的に集書したことで名高い。それを近年『真宗相伝義書』として逐次刊行され始め注目されている一人である。本書は(四)のみを残す他に例をみない蓮如本系の写本で、「或本に云」として(イ)(ロ)の部分⁴⁷⁾が別筆で巻末に収載されて

いる。又異本と校合のあとが見受けられるがその異本が何本かは不明である。本来(回)のみでは不十分とするが同寺の性格から相伝書として、あえて(ハ)の蓮如署名部分は取り除くという事例もあるので、こうした一例と考える方が妥当のようにも思われる。又、香月院文庫蔵の慧琳校合本の開巻の欄外に、上一字切断されて解読不能となっているが、「□印、一玄、御本」^(也)とある一玄はこの一玄と考えてよく、教学相承家として面目躍如たるものを感じしめるであろう。今後、このような相伝書の歎異抄にも注意を払う必要があるかと考えるものである。

以上新出蓮生寺本、再現した専精寺本、三舟文庫本翻刻解題を行ない、他の諸本をめぐっての歎異抄の諸問題について二・三賞書風に書き止めたに過ぎないが、この他にも多くの問題を抱えつつ稿を終えねばならないのが残念でならない。機会があれば補訂を加えたいと願う次第である。

最後に、本稿を成すに至るまでに所蔵者各位はじめ、多くの方々の御高配と御助力を給わり、末尾ながら心から御礼申し上げます。

注

- (1) 当研究所、紀要一—四号彙報参照。
- (2) 多尾頼俊『歎異抄新註』解説一〇頁。
- (3) 古田武彦『親鸞思想—その史料批判—』四二二頁、その他。
- (4) 姫野誠二『歎異抄の語学的解釈』一六頁。
- (5) 同 右 一四頁。
- (6) 『現存目録』第一輯所収本同時代写本十本中三本は所在不明としている。(不明本は№818 №819 真光寺本の二本 №807 常楽寺本 №809 円照寺本四本中の三本をいう。)
- (7) 上宮寺本については、岡崎地方史研究会刊『昭和四十七年版研究紀要』六一頁。以下上宮寺調査記録中に本書は含まれていない。
- (8) 『真宗史料集成』八卷六九六頁。
- (9) 山田文昭『真宗史之研究』三〇七頁。
- (10) 同 右 三〇四頁。
- (11) ⑩の真光寺本は所蔵者が移って⑪の岸部武利蔵本となっている。
- (12) 『国書総目録』二卷一六五頁。
- (13) 『草稿大歎異抄関係図書目録』
- (14) 『真宗学報』二号、附録七頁。
- (15) 『真宗史料集成』四卷九四頁。
- (16) 『真宗史料集成』五〇頁。
- (17) 星野元貞編『性応寺史』五〇頁。
- (18) なお、この目録は現在刊行中の『真宗相伝義書』第十六巻として刊行が予定されている(中外日報、58・9・14)。
- (19) 『真宗史料集成』九卷五一—三頁。
- (20) この目録は活字本に諸本含まれず、十三冊本版本のみに収録されている。なお、別行して転写されたものが、『真宗全書』目録部にあり、又著者自筆原本が岸部武利氏の蔵本中にあり、本文は一部分異なるところがあり、書名も『仮名書目録』となっている。この目録と対をなすが、大谷大学図書館所蔵の八十八部聖教や、滋賀県善立寺に所蔵されてきた惠空書写聖

- (27) 『石山本願寺日記上』二八二頁。
 (28) 多屋頼俊著『歎異抄新註』解題一四・一五頁。
 (29) 山上正尊論文「実悟兼俊筆聖教目録聞書」解説『真宗学報』二号。
 (30) 『真宗史料集成』二卷四四四頁以下。
 (31) 同 右 七四頁。
 (32) 複製影印本歎異抄四四頁。
 (33) 『真宗史料集成』二卷四五二頁。
 (34) 同 右 四七六頁。
 (35) 宮崎田遵著『真宗書誌学の研究』所収二二五七頁以下「願得寺実悟の生涯と業績」参照。
 (36) 『真宗史料集成』五卷六九二頁以下。
 (37) 山田文昭著『真宗史之研究』三一七頁。
 (38) 昭和四十七年新行紀一氏の上宮寺調査記録（岡崎地方史研究会刊四十七年度研究紀要六一頁以下）にも他の聖教は収録されているが歎異抄は未収録となっている。
 (39) 山田文昭著『真宗史之研究』三〇四頁。
 (40) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』九卷一一〇頁。
 (41) 海野浄雄編著『康楽寺』二一〇頁以下、同寺歴史を紹介しているが、十三世了教以前は、他の史徴と合致しない点が多く検討の余地あることを断っておく。
 (42) 上宮寺所蔵『古今纂補抄』卷三。
 (43) 岐阜県養老郡養老町室原安福寺（大谷派）。
 (44) 佐々木月樵編『親鸞伝叢書』二九三頁以下所収。
 (45) 同 右 二九九頁。
 (46) 大阪府枚方市出口光善寺（大谷派）。
 (47) 『統真宗大系』十六卷二〇五頁。

追記

校了後、歎異抄を二本伝持していた和歌山市真光寺を訪う機会に恵まれた。真光寺本については本文中で再々触れる処はあった。しかし、所在不明ということ未調査のままとなっていたので十分な検討を加えることも出来なかった。今回の訪寺で、二本とも現存していることが確認された。ここにその一部を報告し、本文中の一部訂正にかえておきたい。『現存目録』88号本は、本文中いたる処に押紙を用いて、訂正された跡がみられる。押紙の下の文字も、大略解説可能であり、押紙の最も大きなものは、歎異抄本文の終りに近い処で二行にわたっている部分がある。

この個所の訂正文は加えられていないので、対校本になく、底本のみであったものであることが知られる。押紙の下の文は、次の如くである。即ち、「ヲノカ自力ニツノリ宗師聖人ノ御悪名マフシナヌト」の二十四文字であった。この文字は『真宗法要』の校合本の「一本」とされるものや、『真宗仮名聖教』の「又一本」とするものと同文であり、しかもこれ等の校合中、最大の相違個所である。更に押紙訂正と押紙下の文字を部分的ではあるが対照してみると押紙訂正文は、『真宗法要』の本文に相当し、押紙下の本文は、『真宗法要』の「一本」、『真宗仮名聖教』の「又一本」に相当するようであり、多屋頼俊氏が、『歎異抄新注』解説二二頁において「それは何れの本にあるのか、私には未だ明かでない」として以来、不明とされていた一本ではないかと思う。とすれば、本書は『真宗法要』成立以前、一本として校合され、成立後は、『真宗法要』本をもって押紙修正が行なわれたものであろう。このような本書の取扱い方をみる時、又書体の不統一、紙質などから、『現存目録』のいう室町末期の書写ではなく降って近世初期とするのが妥当のようである。又119号本については、現存目録以外に特筆すべきものがないが、巻末の流罪以下の部分で上半分が破損欠失していることを申添えておくに止めたい。

対校本文篇

凡 例

本稿は『歎異抄』の蓮如本に対する三舟文庫本、蓮生寺本の翻刻校合である。それぞれに用いた底本は左の如くである。

一 蓮如本（西本願寺蔵、コロタイプ版等による、以下如とする）

一 三舟文庫本（大谷大学図書館蔵、同本の写真による、以下三とする）

一 蓮生寺本（藤枝市蓮生寺蔵、本研究所蔵の写真による、以下生とする）

翻刻にあたっては次の方針に従った。

一、できるかぎり原本に忠実に翻字するが、略字、異体字の一部は通

用のものに改める。特に三舟文庫本にみられる願（願）拱（拱）

焔慳（煩慳）近（匠）示（榮）等は通用の字とする。また、片仮

名の子（ネ）下（マ）井（キ）等も通用体に改める。

一句読点、朱筆等は省く。まゝ見られる字間のあきも示さない。

一 本文の改行には従わない。いわゆる結語の段落改行のありようは

以下のようにある。改行された冒頭を示すと、

如 「右条々ハミナモテ、

三 段落改行なし、

生 「右条々ハミナモテ、

専 「一 聖人ノツネノオホセニハ、

流罪の文の改行は次の如くである。

如 「後鳥羽院之御宇

「一法然聖人并

「御弟子四人

「親鸞へ越後

「浄聞房

「好覚房

「幸西成覚房

「遠流之人々已上

「被行死罪人々

「一番

「二番

「三番

「四番

「二位法印尊長

「親鸞改僧儀

「彼御申状

「流罪以後

生 「御鳥羽院之御宇

「一法然聖人并御弟子

「親鸞ハ越後国

「浄円房

「好覚房

「幸西成覚房

「遠流之人々已上

「被行死罪人々

「一番

「二番

「三番

「四番

一 いづれかの本文にある文字が、書かれていない場合は・を該当する処に入れて示し、虫損等は□で、墨消で判読可能なものは□、不可能なものは■で示す。但しミセケチと思われるものは左に、をうって示す。

一 補入文字は・の右に8Pで示すが、左に補入文字、訂正文字がある場合は左に示す。重ね書きは本来の文字を本文に入れ、右に訂した文字を示し(重)とする。

一 蓮生寺本の欠落丁は、その初まりと終りに(以下欠)、(以上欠)として示す。

一 参考のため、専精寺本の、蓮如本と異なる部分のみを専として挙げる。白の部分は蓮如本と同文である。他は他本の方法に準ずる。

專 (表紙) 鈔全・
 三 (表紙) 歎異鈔本末
 如 (表紙) 歎異抄一通 蓮如之
 生 (表紙)

專 鈔
 三
 如 歎異抄
 生 歎異抄

專 廻_レ 愚_レ 按_二 勘_二 古_レ 今_二 歎_レ 異_一 先_レ 師_レ 口_レ 傳_レ 之_レ 真_レ 信_二 思_レ 有_二 後_レ 學_レ 相_レ 續_レ 之_レ 疑_レ 惑_二 幸_二 不_レ 依_二 有_レ 縁_一
 三
 如 竊_レ 廻_二 愚_レ 案_一 粗_レ 勘_二 古_レ 今_二 歎_レ 異_一 先_レ 師_レ 口_レ 傳_レ 之_レ 真_レ 信_二 思_レ 有_二 後_レ 學_レ 相_レ 續_レ 之_レ 疑_レ 惑_二 幸_二 不_レ 依_二 有_レ 縁_一
 生 竊_レ 廻_二 愚_レ 案_一 粗_レ 勘_二 古_レ 今_二 歎_レ 異_一 先_レ 師_レ 口_レ 傳_レ 之_レ 真_レ 信_二 思_レ 有_二 後_レ 學_レ 相_レ 續_レ 之_レ 疑_レ 惑_二 幸_二 不_レ 依_二 有_レ 縁_一

專 一 知識^チ者^ニ争^イ得^レ入^ル易^ニ行^ハ哉^ヤ全^ク以^テ自^ラ見^ル之^ノ覺^ク悟^ル莫^ク乱^ル他^ノ力^ノ之^ノ宗^ニ旨^ニ仍^テ故^ク親^ク鸞^ク聖^ク人^ノ御^テ物^ト語^ス

三 一 知識^チ者^ニ争^イ得^レ入^ル易^ニ行^ハ一^ニ門^ニ哉^ヤ全^ク以^テ自^ラ見^ル之^ノ覺^ク語^ニ莫^ク乱^ル他^ノ力^ノ之^ノ宗^ニ旨^ニ仍^テ故^ク親^ク鸞^ク聖^ク人^ノ御^テ物^ト語^ス

如 一 知識^チ者^ニ争^イ得^レ入^ル易^ニ行^ハ一^ニ門^ニ哉^ヤ全^ク以^テ自^ラ見^ル之^ノ覺^ク語^ニ莫^ク乱^ル他^ノ力^ノ之^ノ宗^ニ旨^ニ仍^テ故^ク親^ク鸞^ク聖^ク人^ノ御^テ物^ト語^ス

生 一 知識^チ者^ニ争^イ得^レ入^ル易^ニ行^ハ一^ニ門^ニ哉^ヤ全^ク以^テ自^ラ見^ル之^ノ覺^ク語^ニ莫^ク乱^ル他^ノ力^ノ之^ノ宗^ニ旨^ニ仍^テ故^ク親^ク鸞^ク聖^ク人^ノ御^テ物^ト語^ス

專 一 之^ノ趣^ニ所^レ留^ル耳^ニ底^ニ聊^ニ注^レ之^ノ偏^ニ為^レ散^ル同^ニ心^ニ行^ク者^ノ之^ノ不^ク審^ク也^云

三 一 之^ノ趣^ニ所^レ留^ル耳^ニ底^ニ聊^ニ注^レ之^ノ偏^ニ為^レ散^ル同^ニ心^ニ行^ク者^ノ之^ノ不^ク審^ク也^云

如 一 之^ノ趣^ニ所^レ留^ル耳^ニ底^ニ聊^ニ注^レ之^ノ偏^ニ為^レ散^ル同^ニ心^ニ行^ク者^ノ之^ノ不^ク審^ク也^云

生 一 之^ノ趣^ニ所^レ留^ル耳^ニ底^ニ聊^ニ注^レ之^ノ偏^ニ為^レ散^ル同^ニ心^ニ行^ク者^ノ之^ノ不^ク審^ク也^云

專 一 信^シ

三 一 弥^ノ陀^ノ誓^願不^レ思^ハ議^スニ^タス^ケラ^レマ^ヒラ^セテ^ハト^クル^ナリ^ト信^シテ^ハ念^フ佛^マ

如 一 弥^ノ陀^ノ誓^願不^レ思^ハ議^スニ^タス^ケラ^レマ^ヒラ^セテ^ハト^クル^ナリ^ト信^シテ^ハ念^フ佛^マ

生 一 弥^ノ陀^ノ誓^願不^レ思^ハ議^スニ^タス^ケラ^レマ^ヒラ^セテ^ハト^クル^ナリ^ト信^シテ^ハ念^フ佛^マ

專

・セ

攝取不捨 利益

カケルシメタ

三

フサント思・ヒ立・心・ノオコルトキ則・・・攝取不捨ノ利益ニアツケシメタ

如

フサントオモヒタツコ、ロノオコルトキスナハチ攝取不捨ノ利益ニアツケシメタ

生

ウサントオモヒタツコ、ロノヲコルトキ^スナハチ攝取不捨ノ利益ニアツケシメタ

專

・マ
・フ

老少善

人

・
・唯
・

要

三

マフナリ弥陀ノ本願ニハ老少善惡ノ人・ヲエラハレスタ、信心ヲ要トストシルヘ

如

マフナリ弥陀ノ本願ニハ老少善惡ノヒトヲエラハレスタ、信心ヲ要トストシルヘ

生

マフナリ弥陀ノ本願ニハ老少善惡ノヒトヲエラハ・スタ、信心ヲ要トストシルヘ

專

罪惡深重煩惱熾盛 衆

三

シソノユヘハ罪惡深重煩惱熾盛ノ衆生ヲタスケンカタメノ願ニテマシマスシカレ

如

シソノユヘハ罪惡深重煩惱至常ノ衆生ヲタスケンカタメノ願ニ・マシマスシカレ

生

シソノユヘハ罪惡深重煩惱熾盛ノ衆生ヲタスケンカタメノ願ニテマシマスシカレ

專

要ヨウ

ス

善ゼン

惡アク

三 一 各・・・十余箇國ホヘサカヒヲ越・テ身命ヲカヘリミス・・尋・・キタラシメ

如 一 一 オノノノ十余ケ國ノ・サカヒヲユエテ身命ヲカヘリミスシテタツネキタラシメ

生 一 一 十ヲノノ十余ケ國ノ・サカヒヲユエテ身命ヲカヘリ

ハ本願ヲ信センニハ他ノ善モ要ニアラス念佛ニマサルヘキ善ナキ・ユヘニ惡ヲモ

專

惡アク

・云クモ

三 一 各・・・十余箇國ホヘサカヒヲ越・テ身命ヲカヘリミス・・尋・・キタラシメ

如 一 一 オノノノ十余ケ國ノ・サカヒヲユエテ身命ヲカヘリミスシテタツネキタラシメ

生 一 一 十ヲノノ十余ケ國ノ・サカヒヲユエテ身命ヲカヘリ

オソルヘカラス弥陀ノ本願ヲサマタクルホトノ惡ナキカユヘニト云

オソルヘカラス弥陀ノ本願ヲサマタクルホトノ惡ナキ・ユヘニト云

オソルヘカラス弥陀ノ本願ヲサマタクルホトノ惡ナキカユヘニト云

專

餘ヨ箇カ國クニ

ヘ身シ命ミキ

三 一 各・・・十余箇國ホヘサカヒヲ越・テ身命ヲカヘリミス・・尋・・キタラシメ

如 一 一 オノノノ十余ケ國ノ・サカヒヲユエテ身命ヲカヘリミスシテタツネキタラシメ

生 一 一 十ヲノノ十余ケ國ノ・サカヒヲユエテ身命ヲカヘリ

ハ本願ヲ信センニハ他ノ善モ要ニアラス念佛ニマサルヘキ善ナキ・ユヘニ惡ヲモ

專

タマフオン志シ・
・
・
・
ヒトエニ往生極樂ノ道チ・
ヲ問ヒ・
キカンカタメナリ然ニ・
・
ニ

見ミ聞クセ

如

タマフ御オ・
コヽロサシヒトヘニ往生極樂ノミチヲトヒキカンカタメナリシカルニ
タマ
ヒトヘニ往生極樂ノミチヲトヒキカンカタメナリシカルニ



三

念佛ヨリ外ニ往生ノ道ヲモ存シ又タ法文等ヲモ智タルラント心マク

存ソ知チマタ

如

念佛ヨリホカニ往生ノミチヲモ存知シマ法文等ヲモシリタルラントコヽロニク

念佛ヨリホカニ往生ノミチヲモ存知シマ法文等ヲモシリタルラントコヽロニク

三

・
・
・
オハシマシテハンヘラハオホキナルヲ・
也シ・
若シ・
シカラハ

如

・
オホシメシテオハシマシテハンヘランハオホキナルアヤマリナリモシシカラハ

・
オホシメシテオハシマシテハンヘランハオホキナルアヤマリナリモシシカラハ

生

專

北嶺ホクリン

學匠達ガクシヤウダテ

フ

人ヒト

三

南都北嶺ニモユ、シキ覺匠達シヨウ・オホク坐セラレテ候・・ナレハカノ人・ニモ逢アヒ

如

南都北嶺ニモユ、シキ學生タチオホク座セラレテサフラウナレハカノヒトニモア

生

南都北嶺ニモユ、シキ學生タチオホク座セラレテサフラフナレハカノヒトニモア

專

・
・
・

親鸞シンラン

ヒ

三

・タテマツリテ往生ノ要ヨク・・キカルヘキナリ親鸞ニオヒテハタ、念佛シテ弥

如

ヒタテマツリテ往生ノ要ヨク〈キカルヘキナリ親鸞ニオキテハタ、念佛シテ弥

生

ヒタテマツリテ往生ノ要ヨク〈キカルヘキナリ親鸞ニヲキテハタ、念佛シテ弥

專

人・

別ワケ

三

随ニタスケラレマヒラスヘシト善・人・ノ仰・・ヲカフフムリテ信スル外・ニ別

如

陀ニタスケラレマヒラスヘシトヨキヒトノオホセヲカフ・・リテ信スルホカニ別

生

随ニタスケラレマヒラスヘシトヨキヒトノオホセヲカフ・ムリテ信スルホカニ別

專 子シ細サイ

淨シヨウ土ツト

ハ・ン・ヘ・ル・
・
・
・
・
・

三 ノ子細ナキ也・念佛ハ誠・ニ淨土ニムマル、タネニテヤハンヘ・ラン又・地獄
如 ノ子細ナキナリ念佛ハマコトニ淨土ニムマル、タネニテヤハンヘ・ランマタ地獄
生 ノ子細ナキナリ念佛ハマコトニ淨土ニムマル、タネニテヤハンヘルランマタ地獄

專 ・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
ママタタ地チ獄キョクニニオオツツヘヘキキ業ゴフニニテテヤヤ

三 ニオツヘキコウニテヤハンヘ・ラン惣シテ以テ存知セサル也・タトヒ法然聖人ニ
如 ニオツヘキ業・ニテヤハンヘルラン惣シテモテ存知セサルナリタトヒ法然聖人ニ
生 ニオツヘキ業・ニテヤハンヘルラン惣シテモテ存知セサルナリタトヒ法然聖人ニ

專 後ゴ悔クワイ
・
・
・
・
・

三 スカサレマヒラセテ念佛シテ地獄ニ落・タリ凡・サラニ後悔スヘカラスハ
如 スカサレマヒラセテ念佛シテ地獄ニオチタリトモサラニ後悔スヘカラスサフラウ
生 スカサレマヒラ(以下欠)

自餘シヨヲ

生 如 三 專
ソノユヘハ自餘ノ行・モハケミテ佛ニナルヘカリケル身ミカ念佛ヲマフシテ地獄ニ

後悔コクワイ

生 如 三 專
モ落・テハ・ハ、コソスカサレタテマツリテトイフテ後悔モサウラハメ何レ・
モオチテサフラハ、コソスカサレタテマツリテトイフ・後悔モサフラハメイツレ

身ミ

生 如 三 專
ノ行モ及・カタキ身ナレハトテモ地獄ハ一定スミカゾカシ弥陀ノ本願實マ・ニ
ノ行モオヨヒカタキ身ナレハトテモ地獄ハ一定スミカソカシ弥陀ノ本願マコトニ

説教セキウソラコト

説セキ

善導ゼンダウ

專 三 如 生
オハシマサハ釋尊ノ説教虚・言・アルヘカラス佛説マコトニオハシマサハ善導ノ
オハシマサハ釋尊ノ説教虚・言・ナルヘカラス佛説マコトニオハシマサハ善導ノ

御釋ミシヤク

法然ホウネン

專 三 如 生
御釈虚言アル・・・カラス善導ノ御釈實マ・・ナラハ法然ノ仰ト・・ソラコトナラン
御釋虚言シタマフヘカラス善導ノ御釋マコトナラハ法然ノオホセソラコトナラン

親戀シンレン

候・

專 三 如 生
ヤ法然ノ仰・・誠・・ナラハ親戀カ申・・ムネマタ以テムナシカルヘカラス外・
ヤ法然ノオホセマコトナラハ親戀カマフスムネマタモテムナシカルヘカラスサフ

専
・
・
詮

カ

三
・
・
カ詮スルトコロ愚身ノ信心ニオキテハカクノコトシコノ上・ハ念佛ヲトリテ

如
ラウ敷詮スルトコロ愚身ノ信心ニオキテハカクノコトシコノウヘハ念佛ヲトリテ

生

専

々
御

云

三
信シタテマツラン^云又・ステン^云面々ノオンハカラヒナリト^云

如
信シタテマツラントモマタステントモ面々ノ御・ハカラヒナリト^云

生

専

□

ホ

悪人

人・

悪

三
一善人ナヲ以テ往生ヲトク況・・悪人ヲヤ然・・ヲ世ノ人・常・ニ曰・・悪人

如
一善人ナヲモテ往生ヲトクイハンヤ悪人ヲヤシカルヲ世ノヒトツネニイハク悪人

生

專 ホ

條一且ツキタリ

ナヲ往生ス何・・況・・善人ヲヤ此・條一旦ソノイワレ有・ニ似タレ凡・本願

ナヲ往生スイカニイハンヤ善人ヲヤコノ條一旦ソノイハレアルニニタレトモ本願

生

意趣イシ

作善人ツキタリ

他力タカラ

三

他力ノ意趣ニソムケリ其・故・ハ自力作善ノ人・ハ偏・・ニ他力ヲタノム心・・

生

他力ノ意趣ニソムケリソノユヘハ自力作善ノヒトハヒトヘニ他力ヲタノムコ、ロ

專

陀

キ

カケタル間・・弥随・本願ニアラス然・・凡・自力ノ心・・ヲヒルカヘシテ他力

カケタルアヒタ弥随ノ本願ニアラスシカレトモ自力ノコ、ロヲヒルカヘシテ他力

生

煩惱具足ボンノウクゾク

專 三 如 生
 フタノミタテマツレハ眞實報土ノ往生ヲトクル也・煩惱具足ノ我・等ハ何・・ノ
 フタノミタテマツレハ眞實報土ノ往生ヲトクルナリ煩惱具足ノワレラハイツレノ
 生 如 三 專

生死シヨウシ

ト

三 如 生
 行ニテモ生死ヲハナレル(重)、コトアルヘカラサルコトヲアハレミタマヒテ願ヲ發・・
 行ニテモ生死ヲハナル、コトト(重)アルヘカラサル・・ヲアハレミタマヒテ願ヲオコシ
 生 如 三 專

本意惡人成佛ホンイアクニシヤクフチ

惡人アクニシ

正シヤク

三 如 生
 タマフ本意惡人成佛ノタメナレハ他力ヲタノミタテマツル惡人モツル・往生ノ正
 タマフ本意惡人成佛ノタメナレハ他力ヲタノミタテマツル惡人モ・トモ往生ノ正
 生 如 三 專

專 因^レ

因也・仍^{ヨリテ}・善人タニコソ往生スレマシテ悪人ハトオホセ^レ・・キト^云

生 如 因ナリヨテ善人タニコソ往生スレマシテ悪人ハトオホセサフ^レラヒキ・

生

專 一 慈^シ悲^ヒ 聖道^{シヤクダウ}淨土^{ジユ}

慈^シ悲^ヒ

三 一^四 慈悲ニ聖道淨土ノカハリメアリ聖道ノ慈悲トイフハモノヲアハレミ悲^シ・・ハ

生 如 一^四 慈悲ニ聖道淨土ノカハリメアリ聖道ノ慈悲トイフハモノヲアハレミカナシミハ

生

專

ケン

三 ク、ムナリ然・・^レ思・・カコトク助・・トクルコトキハメテ有・カタシ又淨

生 如 ク、ムナリシカレトモオモフカコトクタスケトクルコトキハメテアリカタシ・淨

專

慈^シ悲^ヒ

大^{ダイ}慈^シ大^{ダイ}悲^ヒ

三

土ノ慈悲トイフハ念佛シテ急^キ・佛ニ成^キ・テ大慈大悲心ヲ以テ思^フ・カコトク衆

生

土ノ慈悲トイフハ念佛シテイソキ佛ニナリテ大慈大悲心ヲモテオモフカコトク衆

如

土ノ慈悲トイフハ念佛シテイソキ佛ニナリテ大慈大悲心ヲモテオモフカコトク衆

如

土ノ慈悲トイフハ念佛シテイソキ佛ニナリテ大慈大悲心ヲモテオモフカコトク衆

專

利^リ益^{ヤク}

今^{イマ}

不^フ敏^ビ

へ

存^ゾ知^チ

三

生ヲ利益スルヲ云^フ・ヘキナリ今生ニイカニイ^ト・オシ不便ト思^フ・凡^ソ・存知ノコト

如

生ヲ利益スルヲイフヘキナリ今生ニイカニイ^トヲシ不便ニオモフトモ存知ノコト

生

生ヲ利益スルヲイフヘキナリ今生ニイカニイ^トヲシ不便ニオモフトモ存知ノコト

專

慈^シ悲^ヒ始^シ終^シ

へ

ホ

三

ク助^タ・カタケレハ此^コ・慈悲始終ナシ然^シ・ハ念佛申^ス・ノミソ末^ノ・トオリタル

如

クタスケカタケレハコノ慈悲始終ナシシカレハ念佛マフスノミソスエトヲリタル

生

クタスケカタケレハコノ慈悲始終ナシシカレハ念佛マフスノミソスエトヲリタル

專 慈^シ悲^ヒ フ 云^{クモ}

三 大慈悲心ニテ催^メ・・ヘキト云^ク

如 大慈悲心ニテサフラウヘキト云^ク

生

專 一 親^シ鸛^フハ父母^モ 孝^キ養^ウ 一^キ遍^フ

三 一^五 親^シ鸛^フハ父母^ノ孝養^ノタメ^ニ一^偏ニテモ念佛^申・タルコト未^タ・^ハハス

如 一^五 親^シ鸛^フハ父母^ノ孝養^ノタメトテ一返^ニテモ念佛^マフシタルコト^イマ^タサフラハス

生

專 有情^ウ 世^セ世^セ 生^シ 父母^フ兄弟^{ケイテイ} コノ順^{ジュン}次^ジ

三 其^キ・故^コ・ハ一切^ノ有情^ハ皆^ニ・以^テ世^々生^々ノ父母^{兄弟}也^ニ・何^ニ・モ^ト 此^ノ・順^{ジュン}次^ジ

如 ソノユヘハ一切^ノ有情^ハミナモテ世^々生^々ノ父母^{兄弟}ナリイツレモ^ト 順^{ジュン}次^ジ

生

專

生・・・ナリテタスケハ・・・ヘキ也・我・力・・ニテハケム善ニテモハ・・

生ニ佛ニナリテタスケサフ라우ヘキナリワカチカラニテハケム善ニテモサフラハ

如

、

・ 回^エ向^ウ

三

ハコソ念佛シ廻向シテ父母ヲ・タスケハ・・メタ・自力ヲステ、急^キ・浄土ノ

生

メ、^(重)コソ念佛ヲ廻向シテ父母ヲモタスケサフラハメタ、自力ヲステ、イソキ・・

專

證^リ・・ヲ開^キ・・ナハ六道四生ノ間・・何^レ・・ノ業^ヲ苦^ニ・シツメリ^ル・神通方便ヲ以

如

サトリヲヒラキナハ六道四生ノアヒタイツレノ業苦ニシツメリトモ神通方便ヲモ

フ

六^{ロク}道^{ダウ}四^シ生^{シヤウ}

業^{ゴウ}苦^ク

ル

神^{シヤウ}通^{トウ}方^{ホウ}便^{ベン}

專 有縁ケ度ト 云

三 テマツ有縁ヲドスヘキナリ・云

如 テマツ有縁ヲ度スヘキナリト云

生

專 一 弟子人・弟子 相論ヲ フ

三 一六 專修念佛ノ輩・・ノ我・才子人・ノ才子トイフ相論・外・・ラン夏・以テ

如 一六 專修念佛ノトモカラノワカ弟子ヒトノ弟子トイフ相論ノサフラウランコトモテ

生

專 子細シ 親鸞シ 弟子一人キ フ

三 ・外・ノ子細也・親鸞ハ才子一人モモタス外・・其・故・ハ我・ハカラヒニテ

如 ノホカノ子細ナリ親鸞ハ弟子一人モモタスサフラウソノユヘハワカハカラヒニテ

生

人・

弟子ナシ

候サシ

御オシ

人・ニ念佛ヲ申・サセハ・ハ、コソオ子ニテモハ・ハメ偏ニ弥陀ノ御モヨオ

ヒトニ念佛ヲマフサセサフハ、コソ弟子ニテモサフハメ・弥陀ノ御モヨホ

生

如

三

專

シニアツカリテ念佛申・ハ・ハ・人・ヲ我・オ子トマフスコトキハメタル荒涼クワツリツ

生

如

三

專

ノコトナリツクヘキ縁・アレハトモナヒハナルヘキ縁・アレハハナル、コトノア

ノコトナリツクヘキ縁・アレハトモナヒハナルヘキ縁・アレハハナル、コトノア

生

如

三

專

リ

候サフ

・人・

弟子ナシ

量

縁ミ

ツキ・

縁ミ

專 師 人

ルヲ・師ヲソムキテヒトニツレテ念佛スレハ往生スヘカラサルモノナリナント、

ルヲモ師ヲソムキテヒトニツレテ念佛スレハ往生スヘカラサルモノナリナント・

生

不^ッ可^カ説^セ

イフコト不可説也・如来ヨリタマハリタル信心ヲワカモノカホニトリカヘサント

イフコト不可説ナリ如来ヨリタマハリタル信心ヲワカモノカホニトリカヘサント

生

自^ッ然^リ理^リ

マフスミヤ返・々・モアルヘカラサルコト・自然ノ理・ニアヒカナハ、

マフスニヤカヘス / 〵モアルヘカラサルコトナリ自然ノコトハリニアヒカナハ、

生

專 佛^{フツ}恩^{オン} . . . 師^シ 恩^{オン}

云

三 仏恩ヲモシリマタ師ノ恩ヲモシルヘキナリト^云

如 佛恩ヲモシリマタ師ノ恩ヲモシルヘキナリト^云

生

專 □ 者^{シヤ} 无^ム 導^ド

ユヘハ

地^チ 祇^キ

三 一^一念佛者・无^ム 導^ドノ一道也・ソノイワレイカントナラハ信心ノ行者ニハ天神地祇モ

如 一^一念佛者ハ无^ム 導^ドノ一道ナリソノイハレイカントナラハ信心ノ行者ニハ天神地祇モ

生

專 敬^{ケツ} 伏^{フツ} 魔^マ 界^{カイ} 外^{クヱ} 道^{ダウ} 章^{シヤウ} 導^ド 業^{ヨウ} 報^{ホウ} 感^{カン}

三 敬^{ケツ} 伏^{フツ} シ 魔^マ 界^{カイ} 外^{クヱ} 道^{ダウ} モ 章^{シヤウ} 導^ド スルコトナシ 罪^{サイ} 惡^{オク} モ 業^{ヨウ} 報^{ホウ} ヲ 感^{カン} スルコトアタハス 諸^{シヨ} 善^{ゼン} モ オヨ

如 敬^{ケツ} 伏^{フツ} シ 魔^マ 界^{カイ} 外^{クヱ} 道^{ダウ} モ 障^{シヤウ} 導^ド スルコトナシ 罪^{サイ} 惡^{オク} モ 業^{ヨウ} 報^{ホウ} ヲ 感^{カン} スルコトアタハス 諸^{シヨ} 善^{ゼン} モ オヨ

生

專

三
ブコトナキユヘニ无^ケ導ノ一道トイヘリト^云

如
フコトナキユヘ・・・・・ナリト^云

生

專
一

非^ヒ行^{キヤウ}非^ヒ善^{セン}

非^ヒ行^{キヤウ}

三
一^ハ念佛ハ行者ノタメニハ非行非善也・我^カ・ハカラヒニテ行スルニアラサレハ非行

如
一^ハ念佛ハ行者ノタメニ・非行非善ナリワカハカラヒニテ行スルニアラサレハ^非行

生

專

善^{セン}

非^ヒ善^{セン}

他^タ力^{リキ}

三
トイフ我・ハカラヒ・^ニテツクル善ニ・アラサレハ非善トイフヒトユニ他力ニシテ

如
トイフワカハカラヒニテツクル善ニモアラサレハ非善トイフヒトヘニ他力ニシテ

生

專 親戀シ 不審シ 唯圓房シオ

三 ヤラントマフシイレテハ・ヒシカハ親戀モ此・不審アリツルニ唯圓房オナシ心

如 ヤラントマフシイレテサフラヒシカハ親戀モユノ不審アリツルニ唯圓房オ(重)ナシコ

生

專 按シ 天シ 地ナ

三 ・・ニテ・アリケリヨクハ案シミレハ天ニオトリ地ニオトルホトニヨロコブヘ

如 ヰロニテヤアリケリヨクハ案シミレハ天ニオトリ地ニオトルホトニヨロコブヘ

生

專 一オ(重)定ト へシ

三 キコトヲヨロコハヌハ・イヨハ往生ハ一定トオモヒタマフヘキナリヨロコブヘ

如 キコトヲヨロコハヌニテイヨハ往生ハ一定・オモヒタマフ・ナリヨロコブヘ

生

專

煩惱 所爲

三

キ心・・ヲオサエテヨロコハセサルハ煩惱ノ所為ナリ然・・ニ佛ハカネテシロシ

如

キコ、ロヲオサヘテヨロコハ・サルハ煩惱ノ所為ナリシカルニ佛・カネテシロシ

生

專

煩惱具足 凡夫

ノ悲願

キ

三

メシテ煩惱具足ノ凡夫トオホセラレタルコトナレハ他力ノ悲願ハカクノコトキノ

如

メシテ煩惱具足ノ凡夫トオホセラレタルコトナレハ他力。悲願ハカクノコトシ・

生

專

三

ワレラカタメナリケリトシラレテイヨ〈タノモシクオホユル也・又・浄土ヘイ

如

ワレラカタメナリケリトシラレテイヨ〈タノモシクオホユルナリマタ浄土ヘイ

生

專

ソキマイリタキ心・・・ナクテイサ、カモ所勞ノコト・アレハ死ナンスルヤラン

ソキマヒリタキコ、ロノナクテイサ、カ・所勞ノコトモアレハ死ナンスルヤラン

生

ソキマヒリタキコ、ロノナクテイサ、カ・所勞ノコトモアレハ死ナンスルヤラン

專

トコ、ロホソクオホユルコトモ煩惱ノ所為也・久遠劫ヨリ今・マテ流轉セル苦惱

トコ、ロホソクオホユルコトモ煩惱ノ所為ナリ久遠劫ヨリイマ、テ流轉セリ苦惱

生

トコ、ロホソクオホユルコトモ煩惱ノ所為ナリ久遠劫ヨリイマ、テ流轉セリ苦惱

專

ノ舊里ハステカタク未・・生・・サル安養ノ浄土ハコヘシカラス外・・夏・實

ノ舊里ハステカタクイマタムマレサル安養・浄土ハコヒシカラスサフコトマ

生

ノ舊里ハステカタクイマタムマレサル安養・浄土ハコヒシカラスサフコトマ

所

セ

煩惱

所為

久遠劫

流轉

ル苦惱

舊里

生

ノ

煩惱ぼんごう

候さうぼう

ナ

縁えん

専 三 如 生
 ・ ・ ニヨク 〈 煩惱ノ興盛 ・ ・ ・ ニコソ名残なごり ・ オシクオモヘ ・ 娑婆ノ縁ツ
 コトニヨク 〈 煩惱ノ興盛ニサフラウニコソオコリナ(重)オシクオモヘトモ娑婆ノ縁ツ

専 三 如 生
 キテチカラナクシテオハルトキニ彼 ・ 土へハマヒルへキナリイソキマイリタキ
 キテチカラ ・ ナクシテオハルトキニカノ土へハマヒルへキナリイソキマヒリタキ

専 三 如 生
 コ、ロナキモノヲコトニアハレミタマフナリコレニツキテコソイヨ 〈 大悲大願
 コ、ロナキモノヲコトニアハレミタマフナリコレニツケテコソイヨ 〈 大悲大願
 大悲大願ダイヒダイガン

專 存ソン候ウラフ。踊ノ。

三 ハタノモシク往生ハ決定ト存知ハ・・ヒ踊躍歡喜・心・・モアリイソキ浄土へ・

如 ハタノモシク往生ハ決定ト存シサフラへ踊躍歡喜ノコ、ロモアリイソキ浄土へモ

生

專 煩惱マノ

三 マイリタクハ・・ハンニハ煩惱ノナキヤラントアヤシクハ・・ヒナマシト云

如 マヒリタクサフラハンニハ煩惱・ナキヤラントア・シクサフラヒナマシト云

生

專 義 不可稱不可說不可思議

三 一⁺念佛ニハ无レ義ヲモツテ義トス不可稱不可說不可思議ノユヘニトオホセ・・ハ

如 一⁺念佛ニハ无レ儀(義重)ヲモ・テ義トス不可稱不可說不可思議ノユヘニトオホセ・・サフ

生

專

カノ御在生オンサイシヤウ

キ

モ

遠トウ

三

・キ抑・・・彼・御在生ノムカシニ同・・・心・サシニシテアユミヲ遠遠リヤウケンノ

如

ラヒキソモ〈カノ御在生ノムカシ・オナシクコ、ロサシヲシテアユミヲ遠遠リヤウケンノ

生

專

洛陽ラクヤウ 信シン コ、ロ 當来トウライ 報土ホウツ

三

洛陽ラクヤウニハケマシ信ヲ一・・ニシテ心・・ヲ當来・報土ニカケン輩・・ハ同時ニ

如

洛陽ラクヤウニハケマシ信ヲヒトツニシテ心・・ヲ當来ノ報土ニカケシトモカラハ同時ニ

生

專

御意趣ゴイソ 人・々・ 老若ラウジャク

三

御意趣ヲ受・給・・シカニ・其・人・々・ニニ・ナヒテ念佛マウサル、老若、其、

如

御意趣ヲウケタマハリシカトモソノヒトノニトモナヒテ念佛マフサル、老若ソ

生

專

マ・

聖人^{シキツ}

近來^{キキ}

三

・カスヲシラスオワシマス中・ニ聖人ノ仰^ム・ニアラサル異義ドモヲ此^レ來^ルハオホ

如

ノカスヲシラスオハシマスマカニ上人ノオホセニアラサル異義トモヲ近來ハオホ

生

專

候^{サラフ}

ヨシ

条々

子細^{サイ}

三

クオホセラレアフテ^ハ・・ヨシツタエウケタマワル・イハレナキ条々ノ子細

如

クオホセラレアフテサフ^ラウヨシツタヘウケタマハル・イハレナキ條々ノ子細

生

專

ノ夏^{ナツ}・

如

ノコト

生

專 □ 一文不通

誓願不思議

三 一文不通ノ輩ノ念佛マフスニアヒテナンチハ誓願ノ

如 一文不通ノトモカラノ念佛マフスニアフテナンチハ誓願不思議ヲ信シテ念佛マ

生

專 ヤ 名號不思議 不思議ノ子細

三 フスカマタ名號不思議ヲ信スルカトイヒオトロカシテフタツノ不思議ノ子細ヲモ

如 フスカマタ名號不思議ヲ信スルカトイヒオトロカシテフタツノ不思議ヲ子細ヲモ

生

專 分明 人 条

三 分明ニイヒヒラカスシテ人ノ心ヲマトハスコト此ノ条返々モ心

如 分明ニイヒヒラカスシテヒトノコ、ロヲマトハスコトコノ条カヘスモコ、ロ

生

專 誓願ミヤクシ 不思議フシギ

ヲ止ト・・テ思ヒ・・ワクヘキコトナリ誓願ノ不思議ニヨリテタモチヤスク称ホ・・易カ

ヲト、メテオモヒワクヘキコトナリ誓願ノ不思議ニヨリテヤスクタモチトナヘヤ

生

名號ミヤクカフ 按アツ

名字ミヤクシ

御約束ミヤクカフ

三 名号ヲ案シイタシタマイテ此・名字ヲ称・ヘン者・ヲムカエ・・ント御約速
如 スキ名號ヲ案シイタシタマヒテコノ名字ヲトナヘンモノヲムカヘトラント御約束
生

專 大悲大願ダイヒダイガン 不思議フシギ

生死シキウシ

アルコトナレハマツ弥陀ノ大悲大願ノ不思議ニタスケラレマヒラセテ生死ヲイツ
三 アルコトナレハマツ弥陀ノ大悲大願ノ不思議ニタスケラレマイラセテ生死ヲイツ
如 アルコトナレハマツ弥陀ノ大悲大願ノ不思議ニタスケラレマヒラセテ生死ヲイツ
生

信シノ

御ミ

自ジ

ヘシト信シテ念佛ノマフサル、モ如来ノ御ハカラヒ・
ヘシト信シテ念佛。マフサル、モ如来ノ御ハカラヒナリトオモヘハスコシモミツ

生

ヘシト信シテ念佛ノマフサル、モ如来ノ御ハカラヒナリトオモヘハスコシモミツ

如

ヘシト信シテ念佛ノマフサル、モ如来ノ御ハカラヒナリトオモヘハスコシモミツ

三

ヘシト信シテ念佛ノマフサル、モ如来ノ御ハカラヒナリトオモヘハスコシモミツ

專

ヘシト信シテ念佛ノマフサル、モ如来ノ御ハカラヒナリトオモヘハスコシモミツ

・
カラノハカラヒマシハラサルカユヘニ本願ニ相應シテ實・
マコトニ報ホウ土ト

生

カラノハカラヒマシハラサルカユヘニ本願ニ相應シテ實・
マコトニ報ホウ土ト

如

カラノハカラヒマシハラサルカユヘニ本願ニ相應シテ實・
マコトニ報ホウ土ト

三

カラノハカラヒマシハラサルカユヘニ本願ニ相應シテ實・
マコトニ報ホウ土ト

專

カラノハカラヒマシハラサルカユヘニ本願ニ相應シテ實・
マコトニ報ホウ土ト

リ是・ハ誓願ノ不思議ヲムネト信シタテマツレハ名号ノ不思議モ具足シテ誓願名
リコレハ誓願ノ不思議ヲムネト信シタテマツレハ名號・不思議モ具足シテ誓願名

生

リコレハ誓願ノ不思議ヲムネト信シタテマツレハ名號・不思議モ具足シテ誓願名

如

リコレハ誓願ノ不思議ヲムネト信シタテマツレハ名號・不思議モ具足シテ誓願名

三

リコレハ誓願ノ不思議ヲムネト信シタテマツレハ名號・不思議モ具足シテ誓願名

專

リコレハ誓願ノ不思議ヲムネト信シタテマツレハ名號・不思議モ具足シテ誓願名

專 號ク 不フ思シ議キ 自ジ . . .

三 号ノ不フ思シ議キ一ツ . . . 自ジ . . .

如 號ノ不フ思シ議キヒトツニシテサラニコトナルコトナキナリツキニミツカラノハカラヒ

生

專 . 善キ惡ク 助 . 鄣 . . . 二フ樣ヤ々 .

三 ヲサシハサンテ善キ惡クノ二ツ . . . 二フ樣ヤ . . .

如 ヲサシハサミテ善キ惡クノフタツニツキテ往生ノタスケサハリ . . . 二フ樣ヤ . . .

生

專 誓キ願ク 不フ思シ議キ 業ゴ . . .

三 誓願ノ不フ思シ議キヲハタノマスシテワカ心 . . . 業ゴヲハケミテマフス所 . . .

如 誓願ノ不フ思シ議キヲハタノマスシテワカコ、ロニ往生ノ業ヲハケミテマフストコロノ

生

人・
・不思議

信

專 念佛ヲモ自力ニナス也・此・人・ハ名号ノ不思議ヲモ又・信セサルナリ信・サレ
 三 念佛ヲモ自行ニナスナリコノヒトハ名號ノ不思議ヲモマダ信セサルナリ信セサレ
 如 念佛ヲモ自行ニナスナリコノヒトハ名號ノ不思議ヲモマダ信セサルナリ信セサレ
 生

專 邊地懈慢疑城胎宮
 果遂
 報土
 名號

三 凡・辺地懈慢疑城胎宮ニモ往生シテ果遂ノ願ノユヘニツイニ報土・生ス・ル
 如 トモ邊地懈慢疑城胎宮ニモ往生シテ果遂ノ願ノユヘニツイニ報土ニ生スルハ名號
 生

專 不思議
 誓願不思議

三 ノ不思議ノチカラナリコレスナワチ誓願不思議ノユヘナレハタ、ヒトツナルヘシ
 如 ・不思議ノチカラナリコレスナハチ誓願不思議ノユヘナレハタ、ヒトツナルヘシ
 生

專 ト云
三 ・
如 ・
生

專 一 經釋キヤウシヤク 學ガク 不定フウテイ 條ジョウ 不足言フツクゴ

三 一 經釈キヤウシヤク ヲヨミ覺セサル輩・・往生不定ノヨシノ支・此・條スコブル不足言ノ義
如 一 經釋キヤウシヤク ヲヨミ學セサルトモカラ往生不定ノヨシノコトコノ條スコブル不足言ノ義

專 フ 眞實シンジツ ノ 聖教シヤク テ

三 トイ・ツヘシ他力眞實ノムネヲアカセルモロノ聖教ハ本願ヲ信シテ念佛ヲマ
如 トイヒツヘシ他力眞實ノムネヲアカセルモロノ正教ハ本願ヲ信シ・念佛ヲマ
生

專

ニ

イツレ

學文ガク

要ヨウ

理リ

三

フサハ佛・ナル・ソノホカナニ・ノ覺聞力ニハ往生ノ要ナルヘキヤマコトニコノ理

生

フサハ佛ニナル・ソノホカナニ・ノ學問カハ往生ノ要ナルヘキヤマコトニコノコ

如

生

專

・
・
・

人ヒト

學文ガク

經釋キヤウシキヤ

三

・
・
・ニマヤウランヒトハイカニモ〈覺聞シテ本願ノムネヲシルヘキナリ經釈

生

トハリニマヨヘランヒトハイカニモ〈學問シテ本願ノムネヲシルヘキナリ經釋

如

生

專

學ガク

聖教シヤクケク

本意ホンイ

条ジョウ

不フ

一文イチモン

三

ヲヨミ覺ストイヘ凡・聖教ノ本意ヲ心・得サル条モツ凡・不便ノ夏・也・一文

如

ヲヨミ學ストイヘトモ聖教ノ本意ヲコ、ロエサル条モ・トモ不便ノコトナリ一文

生

專 不通フツウ

經釋キヤウシヤク

人・

二

三 不通ニシテ經釈ノユクミチモシラサランヒトノ稱・ヘ易ス・カラシカタメノ名号ニ

如 不通ニシテ經釋ノユク・チモシラサランヒトノトナヘヤスカラン・タメノ名號(ニ重)ノ

生

專 テ

易行イキヤウ

学文カクモン

聖道門シヤウダウモン

難行ナンキヤウ

三 テオワシマスユエニ易行トイフ覺聞ヲムネトスルハ聖道門ナリ難行トナツク・

如 ・オハシマスユヘニ易行トイフ學問ヲムネトスルハ聖道門ナリ難行トナツクアヤ

生

專 リ

學文カクモン

名聞利養メイブンリヤウ

住ヂュウ

人・順次ジュンシ

ス

三 ・・覺聞シテ名門利養ノオモヒニ住スルヒト順次ノ往生イカ、アラシラント

如 マ・テ學問シテ名聞利養ノオモヒニ住スルヒト順次ノ往生イカ、アラシラント(ス重)

生

專 證文シヨウモン 候サフフ 當時專修タウジケンシユ 人・ト 人・ト 法論ホフロン

三 イフ證文モハ・・ソカシ當時專修念佛ノ人・ト聖道門ノ人・ト譯論シヤクヲクワタテ

如 イフ證文モサフラウヘキヤ當時專修念佛ノヒト、聖道門ノヒト・法論ヲクワタテ

生

專 ・ 宗シユ 人ヒト ・ 法敵ホフテキ 出来・・シ

三 、我・宗コソスクレタレ人・ノ宗ハオトリタリトイフホトニ法敵ホフテキモイテキタリ謗

如 、ワカ宗コソスクレタレヒトノ宗ハオトリナリトイフホトニ法敵モイテキタリ謗

生

專 ナリ 破謗ハクバウ

三 法モオコル・・コレシカシナカラミツカラ我・法ヲ破謗スルニアラスヤタトヒ諸

如 法モオコル・・コレシカシナカラミツカラワカ法ヲ破謗スルニアラスヤタトヒ諸

生

專 門
コ

甲斐人

門 コソリテ念佛ハカヒナキヒトノタメナリ其・宗アサシイヤシトイフ所・サラニ

門。 □^コソリテ念佛ハカヒナキヒトノタメナリソノ宗アサシイヤシトイフトモサラニ

生

專

下根 凡夫一文不

アラソワスシテワレラカコトク下根ノ凡夫一文不通ノモノ、信・

生

アラソハスシテワレラカコトク下根ノ凡夫一文不通ノモノ、信スレハタスカルヨ

如

アラソハスシテワレラカコトク下根ノ凡夫一文不通ノモノ、信スレハタスカルヨ

三

アラソハスシテワレラカコトク下根ノ凡夫一文不通ノモノ、信スレハタスカルヨ

專

上根 人

アサ

三

シウケタマハリテ信シサフラヘハサラニ上根ノヒトノタメニハ・

如

シウケタマハリテ信シサフラヘハサラニ上根ノヒトノタメニハイヤシクトモワレ

生

シウケタマハリテ信シサフラヘハサラニ上根ノヒトノタメニハイヤシクトモワレ

最上サイシャツ法ホフ

自餘ジヨ教法ケフホフ

専 三 如 生
・ ・ ・ ・ ・ 最上ノ法ニテマシマス
タトヒ自条ノ教法ハ勝・タリ
凡・自・
ラカタメニハ最上ノ法ニテマシ
マス タトヒ自餘ノ教法・スクレ
タリトモミツカラ

器量キリヤウ

人・生死シヤウシ

専 三 如 生
カ為・ニハ器量キオヨハサレハ
ツトメカタシ我・モ人・モ生死
ヲハナレンコトコソ
カタメニハ器量オヨハサレハ
ツトメカタシワレモヒトモ生死
ヲハナレンコトコソ

諸佛シュフツ

・ケ

専 三 如 生
諸仏ノ御本意ニテオワシマセ
ハ御サマ・タケアルヘカラスト
テニクヒケセスハタレ
諸佛ノ御本意ニテオハシマセ
ハ御サマタケアルヘカラスト
テニクヒ氣ケセスハタレ

專 人・

フ

へ

煩惱ぼんごう

三 ・ ・ ・ カアツテアタヲナスヘキヤカツ ・ ハ諍論しやうろんノ所 ・ ・ ニハモロくノ煩惱オコ

如 ノヒトカアリテアタヲナスヘキヤカツ ・ ハ諍論しやうろんノトコロニハモロくノ煩惱オコ

生

專 智者ちやくしやコレヲ 候 ・ ・ ・ 故聖人こせいじん 法ほふ

三 ル智者 ・ ・ ・ 遠離スヘキヨシ ・ 證文しやうもんハ ・ ・ ・ ニコソ故聖人ノ仰おほせ ・ ・ ニハコノ法ヲ

如 ル智者 ・ ・ ・ 遠離スヘキヨシノ證文しやうもんサフヲフニコソ故聖人ノオホセニハコノ法ヲ

生

專 信しんスル衆生しゆじやう 衆生しゆじやう

三 ハ信しんスル衆生モアリソシル衆生モアルヘシト佛説ぶつせつ ・ オカセタマヒタル夏 ・ ナレハ

如 ハ信しんスル衆生モアリソシル衆生モアルヘシト佛トキオカセタマヒタルコトナレハ

生

人ト

佛ヲ説

専 三 如 生
 ・ ・ ・ ステニ信シタテマツル ・ ・ 人 ・ アリテソシルニテ佛説實 ・ ・ 也 ・ ケリトシ
 ワレハステニ信シタテマツルマタヒトアリテソシルニテ佛説マコトナリケリトシ

候サウラフ ・ ・ ・

往生フウシヤウ

一定イチヂヤウ

リ

専 三 如 生
 ラレハ ・ ・ ・ シカレハ往生ハイヨク一定トオモヒタマフヘキナリアヤマツテソ
 ラレサフヲウシカレハ往生ハイヨク一定トオモヒタマフ ・ ・ ナリアヤマ ・ テソ

人ト

信

人

人ト

専 三 如 生
 シル人 ・ ノハ ・ ラハサランニユソイカニ信スル人 ・ ハアレハ ・ ソシルヒトノナキ
 シルヒトノサフヲハサランニユソイカニ信スルヒトハアレトモソシルヒトノナキ

專

ヤラント・オホヘハ・・・ヌヘケレカクマフセハトテカナラスヒトニソシラレン

ヤラントモオホヘサフラヒヌヘケレカクマフセハトテカナラスヒトニソシラレン

生

如

三

佛

信謗

人

生

如

三

世

ヲアラセシト説・ヲカセタマウユトヲマフス・・・

ヲアラセシトトキオカセタマフコトヲマフスナリトユソサフラヒシカイマノ世ニ

生

歎異抄異本研究 対校本文篇

専 學文^{カク} 人^{ヒト} . . . 人^{ヒト} . . . ヲ 候^{オウ}

三 ハ覚聞シテヒトノソシリヲヤメヒトエニ論義問答ヲムネトセントカマヘラレハ

如 ハ學文シテヒトノソシリヲヤメント^{ヒ(重)}ヘニ論義問答・ムネトセントカマヘラレサフ

生

専 . . . 學文^{カク} 如來^ニ 御本意^コ 悲願^{ヒク} 廣大^{クワ} 存知^{ソン}

三 . . . ニヤ覺聞セハイヨ 如来ノ御本意ヲ知・悲願ノ廣大ノムネヲモ存知シテイ

如 ラウニヤ學問セハイヨ 如来ノ御本意ヲシリ悲願ノ廣大ノムネヲモ存知シテイ

生

専 身^ミ 往生^{ワウ} 人^{ヒト} . . . 本願^{ホン} 善惡^{ゼン}

三 ヤシカラ身ニテ往生ハイカ、ナント、アヤフマンヒトニモ本願ニハ善惡淨穢ナ

如 ヤシカラ身ニテ往生ハイカ、ナント・アヤフマンヒトニモ本願ニハ善惡淨穢ナ

生

專 說・聞・

學匠 甲斐

キオモムキヲモ説・聞・サ・レハ・ハ、コソ覺匠ノ甲斐ニテモハ・ラハヌタマ

キオモムキヲモトキキカセラレサフヲハ、コソ學生ノカヒニテモサフヲハメタマ

生

專

本願 相應 念佛 人 學文

〈 ナニコ、ロモナク本願ニ相應シテ念佛スル人・ヲモ覺聞シテコソナント・イ

〈 ナニコ、ロモナク本願ニ相應シテ念佛スルヒトヲモ學文シテコソナント・イ

生

專

オ 法 部 他力 信心

ヒオドサル、コト法ノ魔障也・佛ノ怨敵ナリ自・・他力ノ信心カクルノミナラ

ヒヲトサル、コト法ノ魔障ナリ佛ノ怨敵ナリミツカラ他力ノ信心カクルノミナラ

生

リ 他^マ

ミ・

先^ミ師^シ 御^マ

生 如 三 専
スアヤマツテ他力・マヨハサントスツ、シントオソルヘシ先師ノ御コ、ロニソム
スアヤマ・テ他・ヲマヨハサントスツ、シントオソルヘシ先師ノ御コ、ロニソム

弥^ミ陀^マ 本^ホ願^{クワン}

ト^ト云^{クモ}

生 如 三 専
クコトヲカネテアハレムヘシ弥陀ノ本願ニアラサルコトヲト^云本終
クコトヲカネテアハレムヘシ弥陀ノ本願ニアラサルコトヲ・・・

生 如 三 専
末初

專 □ 彌陀ミ 本願ホカシ 不思議フシギ 惡アク マ 本願ホカシ ニ 往ユク

三一^{十三} 彌陀ノ本願不思議ニオハシマセハトテ惡ヲオソレサルヲ又・本願ホコリトテ往

如 一^{十三} 彌陀ノ本願不思議ニオハシマセハトテ惡ヲオソレサルハ又マ(重)タ本願ホコリトテ往

生

專 生シヤツ 条本願ジョウホカシ 善惡ケンアク 宿業シュクゴフ

三一 生カナフヘカラストイフコトコノ条本願ヲウタカウ善惡ノ宿業ヲ心・得サルナ

如 生カナフヘカラストイフコトコノ条本願ヲウタカフ善惡ノ宿業ヲコ、ロエサルナ

生

專 宿善シュクケン 惡事アクジ 惡業アクゴフ

三 リヨキコ、ロノオコルモ宿業ノモヨフスユエナリ惡キ 支ノオモハレセラル、モ惡業

如 リヨキコ、ロノオコルモ宿善ノモヨホスユヘナリ惡事ノオモハレセラル、モ惡業

生

專

故聖人コシヤツヒ

・兔毛羊毛

キ

三

ノハカラフユヘナリ故聖人ノオホセニハ兔毛羊毛ノサキニイルチリハカリモツク

ノハカラフユヘナリ故聖人ノオホセニハ卯毛羊毛ノサキニイルチリハカリモツク

生

專

宿業シュクゴフ

イフ・

ト

三

ルツミノ宿業ニアラストイフ・コトナシトシルヘシトハ・ヒキマタアルトキ

ルツミノ宿業ニアラストイフ事イフ（重）コトナシトシルヘシトサフラヒキマタアルトヒ（重）キ

生

專

唯圓房タマシツツ

信シ

フ

三

唯圓房ハ我・イフコトヲハ信スルカトオホセノハ・ヒシアヒタサンハ・ト

唯圓房ハワカイフコトヲハ信スルカトオホセノサフラヒシアヒタサンサフラウト

生

如

三

唯圓房ハワカイフコトヲハ信スルカトオホセノハ・ヒシアヒタサンサフラウト

專

・
・
・

ワカ

申・サレ
休・
・
ヒシカハ
・
・
イハン
■コト
タカウ
マシ
キカト
カサ
ネテ
仰キ・

マフ・シ
サフ
ラヒ
シカハ
サラハ
・
イハン
・
コト
タカフ
マシ
キカト
カサ
ネテ
オホ

生

專

・
アリ
・
・

ミ

領リキョウ掌ウシキョウ

人ヒト・

・ノ
休・
・
ヒシア
ヒタツ
、
シンテ
領(マ)狀ウシキョウマフ
サレテ
休・
・
ヒシカハ
タトヘ
ハヒト
ヲ

セノ
サフ
ラヒ
シア
ヒタツ
、
シンテ
領狀
マフ
シ・
テ
サフ
ラヒ
シカハ
タトヘ
ハヒト
・

生

如

三

專

千セン人ニン

往ワウ生シキョウ

一イチ定テイ

・
・
・

千人害レ・
・
テンヤ
シカラハ
往生ハ
一定ス
ヘシト
仰キ・
・
休・
・
ヒシト
キ仰キ・
・
ニテ

千人コ
ロシ
テンヤ
シカラハ
往生ハ
一定ス
ヘシト
オホセ
サフ
ラヒ
シト
キオ
ホセ
ニテ

生

一人^{ヒト}

身^ミ 器^キ量^{リヤウ}

候^{サフラフ} . . .

専 三 如 生

ハサ フラヘトモ一人モコノ身ノ器^キ量ニテハコロシツヘシ^ヒ . . . ト

親^シ鸞^シ ハン

専 三 如 生

マウシテ^ハ . . . ヒシカハサテハ . . . 親鸞^シカイフ . . . コトヲタカウマシキトハイフ

マフシテサフラヒシカハサテハイカニ親鸞^シカイフ . . . コトヲタカフマシキトハイフ

タ

往^リ生^{シヤウ}

専 三 如 生

ソトコレニテシルヘシ^ニ何^ニ . . . 夏^モ . . . コ、ロニマカセタル . . . トナラハ往生ノタメニハ

ソトコレニテシルヘシ^ニナニコトモコ、ロニマカセ^テル^{タ(重)}コトナラハ往生ノタメニ . . .

專 千人ヒヤクニヒト 業ノ

三 千人害・セトイハンニスナハチ害ス・ヘシシカレル・一人ニテモカナヒヌヘキ業

如 千人コロセトイハンニスナハチコロスヘシシカレトモ一人ニテモカナヒヌヘキ業

生

專 縁イ コロサ

三 縁ナキニヨリテ害・セサルナリ我・コ、ロノヨクテコロサヌニハアラスマダ害セ

如 縁ナキニヨリテ害・セサルナリワカコ、ロノヨクテコロサヌニハアラスマダ害セ

生

專 百人ヒヤクニヒト 千人セン 人ニヒト アリ・・

三 ントオモフル・百人千人ヲコロスコトモアルヘシトオホセノハ・ヒシ・ハ我・

如 シトオモフトモ百人千人ヲコロスコトモアルヘシトオホセノサフラヒシカハワレ

生

専

・

悪^{アツ}・・事^シ・

本願^{ホクワン} 不^フ思^シ

三

等^{トウ}カ心^{シン}・・ニヨ^{ノ(重)}キヲハヨシトオモヒアシキ・・ヲハアシ、ト思^シ・ヒテ本願^{ホクワン}ノ不^フ思^シ

如

ラカコ、ロノヨキヲハヨシトオモヒアシキコトヲハアシ・トオモヒテ・願^{ガン}ノ不^フ思^シ

生

専

議^ギ

ラ

・アリ・・

三

議^ギニテタスケタマフトイフコトヲシラサ^{ラ(重)}ラ・コトヲオホセノ外^{ガイ}・・ヒシナリソノ

如

議^ギニテタスケタマフトイフコトヲシル^{ラ(重)}サル・コトヲオホセノサフ^ラヒシナリソノ

生

専

邪見^{ジャケン}

人^{ヒト}・リ 悪^{アツ}

願^{ガン}

三

カミ邪見^{ジャケン}ニオチタルヒトアリテ悪^{アツ}ヲ作^{ツク}・・タルモノヲタスケントイフ願^{ガン}ニテマシ

如

カミ邪見^{ジャケン}ニオチタルヒトア・テ悪^{アツ}ヲツクリタルモノヲタスケントイフ願^{ガン}ニテマシ

生

往生フウシヤウ

本願ホンガン

三 往 生 ノ サ ハ リ タ ル ヘ シ ト ニ ハ ア ラ ス 持 戒 持 律 ニ テ ノ ミ 本 願 ヲ 信 ス ヘ ク ハ ワ レ ラ
 如 往 生 ノ サ ハ リ タ ル ヘ シ ト ニ ハ ア ラ ス 持 戒 持 律 ニ テ ノ ミ 本 願 ヲ 信 ス ヘ ク ハ ワ レ ラ
 生

專 生 死シヤウシ

身ミ 本願ホンガン

三 イ カ テ カ 生 死 ヲ ハ ナ ル ヘ キ ヤ ト カ 、 ル ア サ マ シ キ 身 モ 本 願 ニ ア ヒ タ テ マ ツ リ テ コ
 如 イ カ テ カ 生 死 ヲ ハ ナ ル ヘ キ ヤ ト カ 、 ル ア サ マ シ キ 身 モ 本 願 ニ ア ヒ タ テ マ ツ リ テ コ
 生

專 レ

ラ 惡業アクギョウ

三 ソ ゲ ニ ホ コ ラ レ 休 ・ ・ ヘ サ レ ハ ト テ 身 ニ ソ ナ ヘ サ ラ ン 惡 業 ハ ヨ モ ツ ク ラ レ 休 ・ ・
 如 ソ ケ ニ ホ コ ラ ン サ フ ラ ヘ サ レ ハ ト テ 身 ニ ソ ナ ヘ サ フ ン 惡 業 ハ ヨ モ ツ ク ラ レ サ フ ラ
 生

專 八 世^マ 山野^{ヤマノ}・ 方

三 ハシモノヲ又・海・川・ニアミヲヒキツリヲシテ世ヲワタルモノモ野山^ノ・二塵^ニ・

如 ハシモノヲマタウミカワニアミヲヒキツリヲシテ世ヲワタルモノモ野^ノヤマニシ、

生

專 ヒ

三 ヲカリ鳥・ヲ取^リ・テ命^ヲ・・ヲツク輩^ヲ・・モアキナヒヲシ田畠^ヲ作^リ・・テスグル

如 ヲカリトリヲトリテイノチヲツクトモカラモアキナキヲシ田畠^ヲツクリテスグル

生

專 人・ ア セ フ

三 ヒトモタ、オナシコトナリトサ・ルヘキゴフエンノモヨフセハイカナルフルマヒ

如 ヒトモタ、オナシコトナリトサ・ルヘキ業・縁・ノモヨホサハイカナルマ^フマルマヒ

生

専
キ

モ・ヘシトコソ聖人ハ仰キ・・休・・ヘシニ當時ハ後世者ブリシテヨカランモノハ

モスヘシトコソ聖人ハオホセサフラヒシニ當時ハ後世者フリシテヨカランモノハ

生

専

様・

ハ・

ア

リ・

ン

カリ念佛マフスヘキヤウニオモヒアルヒハ・道場ニハリフミヲシテ難・々・ノ夏

カリ念佛マフスヘキヤウニ・・アルヒ^{ハ(重)}□_清道場ニワリフミヲシテナムノコ

生

如

三

専

・シタランモノヲハ道場ヘイレヘカラスナント、イフコトヒトエニ現善精進ノ相

生

トシタランモノヲハ道場ヘイルヘカラスナント、イフコトヒトヘニ賢善精進ノ相

專

ヲホカニシメシテ内・ニハ虚假コケヲイタ・ケルモノカ願ニホコリテツ・ランツミモ

ヲホカニシメシテウチニハ虚假コケヲイタ・ケルモノカ願ニホコリテツクランツミモ

生

專

宿業ノモヨフスユヘ也・サレハヨキコトモアシキコトモ業報ニサシマカセテニヒト

宿業ノモヨホスユヘナリサレハヨキコトモアシキコトモ業報ニサシマカセテヒト

生

專

エニ本願ヲタノミマイラスレハコソ他力ニテハハハ・ヘ唯信抄ニモ弥陀ノ・カバ

ヘニ本願ヲタノミマヒラスレハコソ他力ニテハサフラヘ唯信抄ニモ弥陀・イカハ

ヘニ本願ヲタノミマヒラスレハコソ他力ニテハサフラヘ唯信抄ニモ弥陀・イカハ

生

身

専 三 如 生
 カリノチカラマシマス
 トシリテカ罪業ノ身ナレハ
 スクワレカタシトオモフヘキ
 ト
 カリノチカラマシマス
 トシリテカ罪業ノミナレハ
 スクハレカタシトオモフヘキ
 ト

専 三 如 生
 候
 ・
 ・
 ・
 外・・・ソカシ本願ニホコ
 ルコ、ロノアランニツケテ
 コソ他力ヲタノム信心モ決
 サフラウソカシ本願ニホコ
 ルコ、ロノアランニツケテ
 コソ他力ヲタノム信心モ決

専 三 如 生
 定ス・ヘキコトニテサ
 フラヘオホヨソ悪業煩惱ヲ
 断シツクシテノチ本願ヲ信
 セン
 定シヌヘキコトニテサ
 フラヘオホヨソ悪業煩惱ヲ
 断シツクシテノチ本願ヲ信
 セン

專 三 如 生
 ノミソ願ニホコルオモヒ・ナクテヨカルヘキニ煩惱ヲ断シナハ五劫思惟佛・也・
 ノミソ願ニホコルオモヒモナクテヨカルヘキニ煩惱ヲ断シナハスナハチ佛ニナリ

專 三 如 生
 仏ノタメニハ五劫思惟ノ願ソノ詮ナクヤマシマサン本願ホユリトイマシメラル、
 佛ノタメニハ五劫思惟ノ願ソノ詮ナクヤマシマサン本願ホユリトイマシメラル、

專 三 如 生
 人・々・
 人・々・モ煩惱不浄具足セラレテ・外・ヒケ・レ・ソレハ願ニホコラル、ニ
 ヒトノモ煩惱不浄具足セラレテコソサフラウケナレ・ソレハ願・ホコラル、ニ

專

ツレノ

候・・・

三

アラスヤイカナル悪ヲ本願ホコリトイヒイカナル悪カホコラヌニテハ・・・ヘキ

如

アラスヤイカナル悪ヲ本願ホコリトイフイカナル悪カホコラヌニテサフラウヘキ

生

專

オ
カナト云

三

ソヤカヘリテコ、ロヲサナキコトカ・

如

ソヤカヘリテコ、ロヲサナキコトカ・

生

專
一

三
一十四

一念ニ八十億劫ノ重罪ヲ滅スト信スヘシトイフコトコノ条八十悪五逆ノ罪人ヒ

如
一十四

一念ニ八十億劫ノ重罪ヲ滅スト信スヘシトイフコトコノ条八十悪五逆ノ罪人日

生

專

コロ念佛・マフサスシテ命終ノ時・初・テ善知識ノオシヘニテ一念マフセハ八

コロ念佛ヲマフサスシテ命終ノトキハシメテ善知識ノヲシヘニテ一念マフセハ八

生

專

十億劫ノツミヲ滅シ十念マウセハ八十億劫ノ重罪ヲ滅シテ往生ストイフ・コレ

十億劫ノツミヲ滅シ十念マフセハ八十億劫ノ重罪ヲ滅シテ往生ストイヘリコレ

生

專

八十悪五逆ノ輕重ヲシラセンカタメニ一念十念トイヘルカ滅罪ノ利益也・未_マ・

八十悪五逆ノ輕重ヲシラセンカタメニ一念十念トイヘルカ滅罪ノ利益ナリイマタ

生

歟

オ

。一念

專

・
・

ル

我、
・ ・ カ信スル所 ・ ・ ニオヨハスソノユヘハ弥陀ノ光明ニテラサレマイラスルユ

ワレラカ信スルトコロニオヨハスソノユヘハ弥陀ノ光明ニテラサレマヒラス。ルユ

生

專

エニ一念發起スル時 ・ 金剛ノ信心ヲタマワリヌレハステニ定聚ノ位 ・ ・ ニ撰、
・ ・

ヘニ一念發起スルトキ金剛ノ信心ヲタマハリヌレハステニ定聚ノクラキニオサメ

生

專

フテ

部

・ ・ タマイテ命終スレハモロ 〈 ノ煩惱惡障ヲ轉シテ无生忍ヲサトラシメタマフ

シメタマヒキ命終スレハモロ 〈 ノ煩惱惡障ヲ轉シテ无生忍ヲサトラシメタマフ

生

專

イヤ・

三

ナリコノ悲願マシマサスンハカ、ルアサマシキ罪人イカテカ生死・解脱スヘキト

如

ナリコノ悲願マシマサス・ハカ、ルアサマシキ罪人イカテカ生死ヲ解脱スヘキト

生

專

ノ

三

オモヒテ一生ノアヒタマフス所・・ノ念佛ハミナコトくク如来・・・ヲ

如

オモヒテ一生ノアヒタマフストコロノ念佛ハミナコトくク如来・大悲ノ恩ヲ報

生

專

ス・

三

・・・謝ス・オモフヘキナリ念佛マウサンコトニツミヲホロホサント信セ・ハス

如

シ徳ヲ謝ストオモフヘキナリ念佛マフサンコトニツミヲホロホサント信^{ン(重)}センハス

生

候
・
・
・

生 如 三 專
 テニ我・ト罪・ヲケシ・往生セントハケムニテコソ外
 テニワレトツミヲケシテ往生セントハケムニテコソサ
 フラウナレモシシカラハ一

生 如 三 專
 生ノ間・思・ヒテオモフコトミナ生死ノキツナニアラサルコトナケレハ命
 生ノアヒタオモヒトオモフコトミナ生死ノキツナニアラサルコトナケレハイノチ

生 如 三 專
 ツキルマテ念佛退轉セスシテ往生スヘシタ、シ業報カキリアルコトナレハイカナ
 ツキンマテ念佛退轉セスシテ往生スヘシタ、シ業報カキリアルコトナレハイカナ
 クル

專

ル不思議ノコトニモアヒマタ病惱苦痛アツク・セメラレテ正念ニ住セスシテオハラン・

ル不思議ノコトニモアヒマタ病惱苦痛ヲセメ・・テ正念ニ住セスシテヲハラシテ

(以上欠)アヒマタ病惱苦痛ヲセメ・・テ正念ニ住住セセスシテヲハラシテ

オ

專

・・・コト・・・ソノアヒタノツミヲハイカ、シテ滅スヘキヤツミキエサレハ

佛マフスコトカタシソノアヒタノツミヲハ(重)イカ、シテ滅スヘキヤツミキエサレハ

佛マウスコトカタシソノアヒタノツイカ、シテ滅スヘキヤツミキエサレハ

ハイ

ヘ

專

往ワウ生シヤウハ

歟

往生・カナフヘカラサルカ攝取不捨ノ願ヲ頼・・タ・マ・ラハイカナル不思議ア

往生ハカナフヘカラサルカ攝取不捨ノ願ヲタノミタテマツラハイカナル不思議ア

往生ハカナフヘカラサルカ攝取不捨ノ願ヲタノミタテマツ(以下欠)

オ

專 三 如 生
 ッテ悪業ヲオカシ念佛マフサスシテオワル^ル・速・^ニ往生ヲトクヘシ又・念
 リテ罪業ヲオカシ念佛マフサスシテヲハルトモスミヤカニ往生ヲトクヘシマタ念

專 三 如 生
 佛ノマウサレンモタ、イマ證^リ・^ヲヒラカンスル期ノチカツクニシタカイテモイ
 佛ノマフサレンモタ、イマサトリヲヒラカンスル期ノチカツクニシタカイテモイ

彌

候・^ハ・^重・^ハ

專 三 如 生
 ヨ^ハ^重^ハ 彌^ハ 陀^ハ ヲタノミ御恩ヲ報シタテマツルニテコソ^ハ 外^ハ・ラ^ハ ワ^ハ メ^ハ 罪^ハ・ヲ^ハ 滅^ハ セ^ハ ン^ハ ト^ハ オ
 ヨ^ハ^重^ハ 彌^ハ 陀^ハ ヲタノミ御恩ヲ報シタテマツルニテコソ^ハ サ^ハ フ^ハ ラ^ハ ウ^ハ メ^ハ ツ^ハ ミ^ハ ヲ^ハ 滅^ハ セ^ハ ン^ハ ト^ハ オ

專

人・

三

モフハンハ自力ノ心・・ニシテ臨終正念トイノルヒトノ本意ナレハ□他重他力ノ信心

如

モ・ハンハ自力ノ心、ロニシテ臨終正念トイノルヒトノ本意ナレハ・他力ノ信心

生

專

ト云

三

ナキニテハ・・ナリ・・

如

ナキニテサフラウナリ・・

生

專

□

チ

三^{十五}

煩惱具足ノ身ヲモツテステニ證^リ・・開^リ・・トイフコトコノ条モツテノホカノ

如^{十五}

煩惱具足ノ身ヲモ・テステニサトリヲヒラクトイフコトコノ条モ・テノホカノ

生

專

。フ
フ

眞

三

コトニテハ・・・即身成仏ハ眞言秘教ノ本意三密宝密行業ノ證果也・六根清淨・又・

如

コトニ・サフラウ即身成佛ハ眞言秘教ノ本意三蜜行業ノ證果ナリ六根清淨ハマタ

生

專

華
所
樂

三

法花一乗ノ所説四安樂ノ行ノ感徳也・是_レ・皆_ミ・難行上根ノツトメ觀念成就ノサト

如

法花一乗ノ可説四安樂ノ行ノ感徳ナリコレミナ難行上根ノツトメ觀念成就ノサト

生

專

スル・ユヘ

三

リナリ来生ノ開覚ハ他力淨土ノ宗旨信心決定ノ道ナルカユヘマリコレ又・易行下

如

リナリ来生ノ開覚ハ他力淨土ノ宗旨信心決定ノ通・・・故・ナリコレマタ易行下

生

專

根ノツトメ不簡善惡ノ法ナリオ・ヨソ今生ニオヒテ・煩惱惡障ヲ断センコトキワ

根ノツトメ不簡善惡ノ法ナリオホヨソ今生ニオイテハ煩惱惡障ヲ断センコトキハ

生

專

メテアリカタキ間・真言法花・行スル淨侶^ツナヲモツテ順次生ノサトリヲイノル

メテアリカタキアヒタ真言法花ヲ行スル淨侶^ツナヲモ・テ順次生ノサトリヲイノル

生

如

三

專

慧

イカニイワンヤ戒行惠解トモニナシトイヘ^ル・弥^チ陀ノ願^{ネン}船^{セン}ニ乗シテ生死ノ苦海ヲ

イカニイハンヤ戒行惠解トモニナシトイヘトモ弥^チ陀ノ願^{ネン}船^{セン}ニ乗シテ生死ノ苦海ヲ

生

ヒ

章

華

ホ

專 種

尊ノコトク種々ノ應化ノ身ヲモ現ニ三十二相・隨形好ヲモ具足シテ説法利益ハ
尊ノコトク種□ノ應化ノ身ヲモ現シ三十二相八十隨形好ヲモ具足シテ説法利益サ
尊ノコトク種々ノ應化ノ身ヲモ現シ三十二相八十隨形好□ヲモ具□シテ説法利益サ

專 フ

・・ニヤコレヲコソ今生ニサトリヲヒラク本トハ申・休・ヘ和讃ニノタマ
フラウニヤコレヲコソ今生ニサトリヲヒラク本トハマフシサフラヘ和讃ニイ・
フラフ□ヤコレヲコソ今生ニサトリヲヒラク本トハ(以下欠)

專 ・

ワク金剛堅固ノ信心ノ・定^ル・・時・ヲマチエテソ・弥随ノ心光照護シテ永^ル・
ハク金剛堅固ノ信心ノ。サタマルトキヲマチエテソ。弥陀ノ心光攝護シテナカク

生 死 ヲ ハ ヘ タ テ ・ ・ ・ ・ ・
 生 死 ヲ ・ ヘ タ テ ケ ル ト ハ サ フ ラ ウ ハ 信 心 ノ サ タ マ ル ト キ ニ ヒ ト タ ヒ 攝 取 シ テ ス テ

回

フ

タ マ ハ サ レ ハ 六 道 ニ 輪 廻 ス ヘ カ ラ ス シ カ レ ハ ナ カ ク 生 死 ヲ ハ ヘ タ テ サ フ ラ ウ ソ カ

シ カ ク ノ コ ト ク 智 ・ ヲ 證ル ・ ・ ト ハイ ヒ マ キ ラ カ ス ヘ キ ヤ ア ハ レ ニ 外 ・ ・ ヲ ヤ 淨
 シ カ ク ノ コ ト ク シ ル ヲ サ ト ル ト ハイ ヒ マ キ ラ カ ス ヘ キ ヤ ア ハ レ ニ サ フ ラ ウ ヲ ヤ 淨

リ

フ

專 真

ト 候 . . .

三 土真宗ニハ今生ニ本願ヲ信シテ彼・土ニシテ證・ヲハ開・トナラヒハ・

如 土真宗ニハ今生ニ本願ヲ信シテカノ土ニシテサトリヲハヒラク。ナラヒサフラウ

(以上欠)ヒサフラフ

生

專

ヒ ト云

三 ・トコソ故聖人ノオホ・ニハハ・ヒシカ・

如 ソトコソ故聖人ノオホセニハサフラウシカ・

生 □ト・故聖人ノオホセニハサフラ□シカ・

專 一

サ

同朋

三 信心ノ行者自然ニハラヲモス、アシサマナルコトヲモオカシ同朋同侶ニモアヒ

如 信心ノ行者自然ニハラヲモタテアシ□マナルコトヲモオカシ同朋同侶ニモアヒ

生 信心ノ行者自然ニハラヲモタテアシサマナルコトヲモオカシ同朋同侶□□□ヒ

專 同 心・地 他力

三 テ口論ヲモシテハカナラス廻心スヘシトイフコトコノ条断悪修善ノ心・地カ・

如 テ口論ヲモシテハカナラス廻心スヘシトイフコトコノ条断悪修善ノコ、チカ・

生 テ口論ヲモシテハカナラス廻心スヘシトイフコトコノ条断悪修善ノコ、チカ・

專 人・オヒテ・同 一・度・ 同

三 一向専修ノ人・ニオヒテハ廻心トイフコトタ、一・度・アルヘシ其、廻心トハヒ

如 一向専修ノヒトニ^オ・^イ・^テ・^ハ廻心トイフコトタ、ヒトタヒアルヘシソノ廻心・ハ日

生 一向専修ノヒトニヲヒテハ廻心トイフコトタ、ヒトタヒアルヘシソノ廻心・ハ日

專 人・

三 コロ本願他力真宗ヲシラサル人・弥随ノ智慧ヲタマワリテヒコロノコ、ロニテ・

如 コロ本願他力真宗ヲシラサルヒト弥陀ノ智慧ヲタマハリテ日コロノコ、ロニテハ

生 コロ本願他力真宗ヲシラサルヒト弥随ノ智慧ヲタマハリテ日コロノコ、ロニテハ

專

往生カナフヘカラストオモヒテモトノコ、ロヲヒキカエテ・本願ヲタノミマヒラ

三

往生カナフヘカラストオモヒテモトノコ、ロヲヒキカヘ^テ□^テ本願ヲタノミマヒラ

如

往生カナフヘカラストオモヒテモトノコ、ロヲヒキカヘテ・本願ヲタノミマヒラ

生

往生カナフヘカラストオモヒテモトノコ、ロヲヒキカヘテ・本願ヲタノミマヒラ

コト 朝・夕・同

專

スルヲユソ廻心トハマフシ^ハ・ヘ一切ノコトニ朝・夕・ニ廻心シテ往生ヲ

三

スルヲユソ廻心トハマフシ^ハ・ヘ一切ノ事^シ・ニアシタユフ^ハ。ニ廻心シテ往生ヲ

如

スルヲユソ廻心トハマウシサフラヘ一切ノ事^シ・ニアシタユフヘニ廻心シテ往生ヲ

生

スルヲユソ廻心トハマウシサフラヘ一切ノ事^シ・ニアシタユフヘニ廻心シテ往生ヲ

テ・

候・人・

イキ

オ

三

トケ^ハ・・ベクハヒトノ命^メ・ハ出・イキ入・イキヲマタスシテオワルコト

如

トケサフラウヘクハヒトノイノチハイツルイキイルホトヲマタスシテヲハルコト

生

トケサフラフヘクハヒトノイノチハイツルイキイルイキヲマタスシテヲハ^ル□^ト

專

同

柔和

ハ

三

ナレハ廻心モセス柔和忍辱ノオモヒニモ住セサランサキニ命チ・ツキ・ハ攝取不

如

ナレハ廻心モセス柔和ワカ忍辱ノオモヒニモ住セサランサキニイノチツキ・ハ攝取不

生

ナレハ廻心モセス柔和ワカ忍辱ノオモヒニモ住セサランサキニイノチツキナハ攝取不

專

・
・
マ・

三

捨ノ誓願ハムナシクナラセオワシマスヘキニヤ口・ニハ願力ヲ頼マ・タテマツル

如

捨ノ誓願ハムナシクナラセオハシマスヘキニヤクチニハ願力ヲタノミタテマツル

生

捨ノ誓願ハムナシクナラセオハシマスヘキニヤクチニハ願力ヲタノミタテマツル

專

ク・
フ
■思

三

トイヒテコヽロニハイカニ悪人ヲタスケントイフ・
トイヒテコヽロニハサコソ悪人ヲタスケントイフフ(重)願不思議ニマシマス

如

トイヒテコヽロニハサコソ悪人ヲタスケントイフフ(重)願不思議ニマシマス

生

トイヒテコヽロニハサコソ悪人ヲタスケントイフ願不思議ニマシマス

專

コトナレハ我・ハカラヒナルヘカラスワロカランニツケテモイヨ〈願力ヲアフ

如

コトナレハワカハカラヒナルヘカラスワロカランニツケテモイヨ〈願力ヲアフ

生

コトナレハワカハカラヒナルヘカラスワロカランニツケテモイヨ〈願力ヲアフ

三

キマイラセ・・・・・テ柔和忍辱ノ心・モイテクヘシ・・・ヨロツノ

如

キマヒラセハ自然ノコトハリニテ柔和忍辱ノコ、ロモイテクヘシスヘテヨロツノ

生

キマヒラセハ自然ノコトハリニテ柔和忍辱ノコ、ロモイテクヘシスヘテヨロツノ

專

カ
コトニツケテ往生ニハカシコキオモヒヲ具セスシテ・ホレ〈ト弥陀ノ御恩ノ

ル

フ

生

コトニツケテ往生ニハカシコキオモヒヲ具セスシテタ、ホレ〈ト弥陀ノ御恩ノ

如

コトニツケテ往生ニハカシコキオモヒヲ具セスシテタ、ホレ〈ト弥陀ノ御恩ノ

三

コトニツケテ往生ニハカシコキオモヒヲ具セスシテ・ホレ〈ト弥陀ノ御恩ノ

專 二 候

深重ナルコトツネニ・思・ヒ出・テマイラスヘシシカレハ念佛モマウサレハ

深重ナルコトツネ・ハオモヒイタシマヒラスヘシシカレハ念佛モマフサレサフ

深重ナルコトツネ・ハオモヒイタシマヒラスヘシシカルハ念佛モマウサレサフ

生 如 三 專

・コレ自然也・ワカハカラハサル・

ウコレ自然ナリワカハカラハサルヲ自然トマフスナリコレスナハチ他方ニテマシ

フコレ自然ナリカワハカラハサルヲ自然トマウスナリコレスナハチ他方ニテマシ

生 如 三 專

ヲ自然トマフスナリ

レ シリ

マス・シカルヲ自然トイフコトノ別ニアルヤウニ我・者・知

マス・シカルヲ自然トイフコトノ別ニアルヤウニワ^{レ(重)}モノ^シ

マス・シカルヲ自然トイフコトノ別ニアルヤウニワレモノシリ

専

人

フ

キコト・ナリト云

三

カホニイフヒトノハ・ヨシウケタマハルアサマシクハ・ナリ

如

カホニイフヒトノサフラウヨシウケタマハルアサマシクサフラウ

生

カホニイフヒトノサフラフヨシウケタマハルアサマシク。サフラフナリ

専
□

人

・

・

イツレ

三

一辺地ノ往生ヲトクルヒト・ツキニハ地獄ニオツヘシトイフコトコノ条何

如

^{十七}一辺地・往生ヲトクルヒト・ツキニハ地獄ニオツヘシトイフコトコノ条ナニ

生

^{十七}一辺地ノ往生ヲトクルヒトノツキニハ地獄ニオツヘシトイフコトコノ条イツレノ

専

フ

匠

人

サ

三

證文ニミエハ・ソヤ覚匠シヨタツル人・ノ中・ニイヒイ・タサル、コトニテハ・

如

證文ニミヘサフラウソヤ學生タツルヒトノナカニイヒイサ(重)ル、コトニテサフラ

生

證文・ミエサフラフソヤ學生タツルヒトノナカニイヒイサ(重)ル、コトニテサフラ

專

フ
キコトニテ

聖

様

三

・ナルコソアサマシク・
・外・
・へ經論聖教ヲハイカヤウニミナサレテ外・

如

ウナルコソアサマシク・
・サフラへ經論正教ヲハイカヤウニミナサレテサフ

生

フナルコソアサマシク・
・サフラへ經論聖教ヲハイカヤウニミナサレテサフ

專

フ

三

・
・ラン信心カケタル行者ハ本願ヲ疑・
・フニヨリテ邊地ニ生シテウタカイノ

如

ラウ・ラン信心カケタル行者ハ本願ヲウタカフニヨリテ邊地ニ生シテウタカヒノ

生

ラフヤラン信心カケタル行者ハ本願ヲウタカフニヨリテ邊地ニ生シテウタカヒノ

專

ツミヲツクノヒテ後・
ノ

三

ツミヲツクノヒテ後・
・報土ノ證・
・ヲ開・
・トコソウケタマハリ外・
・信心

如

ツミヲツクノヒテノチ報土ヲサトリヲヒラクトコソウケタマハリサフラへ信心ノ

生

ツミヲツクノヒテノチ報土ノサトリヲヒラクトコソウケタマハリサフラへ信心ノ

專一

ヒ

三^六 佛法ノ方・ニ施入物ノ多少ニ隨^レ・・・テ大小佛ニナルヘシトイフコトコノ条不可

如^六 佛法ノカタニ施入物ノ多少ニシタカ・テ大小佛ニナルヘシトイフコトコノ条不可

生^六 佛法ノカタニ施入物ノ多少ニシタカ・テ大小佛ニナルヘシトイフコトコノ条不可

專 ．．．様々

三 説也．．．比興^{ヒキヤウ}ノコトナリマツ佛ニ大小ノ分リヤウヲサタメンコトアルヘカ

如 説ナリミミ．．．比興ノコトナリマツ佛ニ大小ノ分量．．．ヲサタメンコトアルヘカ

生 説ナリ々々．．．比興ノコトナリマツ佛ニ大小ノ分量．．．ヲサタメンコトアルヘカ

專 候．．．ヲヤ

キ．．．候．．．

三 ラスハ．．．ヤ彼、安養浄土ノ教主ノ御身量ヲ説^レ．．．テハ．．．モソレハ方便

如 ラスサフラウ．カカノ安養浄土ノ教主ノ御身量ヲトカレテサフラウモソレハ方便

生 ラスサフラフ．ヤカノ安養浄土^ノ教主ノ御身量ヲトカレテサフラフモ(以下欠)

專

報身ノ形チ・・也・法性リ・證リ・・ヲ開リ・・テハ長短方圓ノ形チ・・ニモアラス青黄赤

報身ノカタチナリ法性ノサトリヲヒラヒテ・長短方圓ノカタチニモアラス青黄赤

生

專

白黒ノ色・ニモハナルレ・・ハナニヲモツテカ大小ヲ定ム・・ヘキヤ念佛マウス

白黒ノイロヲモハナレ・・ナ・ハナニヲモ・テカ大小ヲサタムヘキヤ念佛マウス

生

專

ニ化佛ヲ拜ミ奉ル・・・・夏ノ外ノ・・ナルコソ大念ニハ大佛ヲ見小念ニハ

ニ化佛ヲミタテマツルトイフコトノサアラウナルコソ大(重)念念ニハ大佛ヲミ小念ニハ

生

フ

大念

タルナレ

チ

キハ

專 三 如 生
 小佛ヲ見ル・トイフ・カ若^レ・コノコトハリナントニハシヒキカケラ^レ_四候^ヲ・
 小佛ヲミルトイヘルカモシユノコトハリナントニハシヒキカケラ^レサフラウヤラ

專 三 如 生
 フ
 シンカツ・又・檀波羅密ノ行ト・イヒツヘシイカニ宝^ヲ・物^ヲ・ヲ佛前ニモナケ師
 シンカツ・ハマタ檀波羅蜜ノ行トモイヒツヘシイカニタカラモノヲ佛前ニモナケ師

專 三 如 生
 匠^ニモ施^ス・^ハ・信心カケナハ^ハ・詮アルヘカラス一紙半錢モ佛法ノ方^ニ・イ
 匠ニモホトコストモ信心カケナハソノ詮ナシ^ハ・^ハ・一紙半錢モ佛法ノカタニイ

生 如 三 專
 法 然 聖 人 ノ 仰^ト ・ ・ ・ ニ ハ 源 空 カ 信 心 モ 如 来 ヨリ 給 ・ ・ ・ リ タル 信 心 ナリ ・ ・ ・
 法 然 聖 人 ノ オ ホ セ ニ ハ 源 空 カ 信 心 モ 如 来 ヨリ タ マ ハ リ タル 信 心 ナリ 善 信 房 ノ 信 心
 法 然 聖 人 ノ オ ホ セ □ □ □ □ カ 信 心 モ 如 来 ヨリ タ マ ハ リ タル 信 □ ナリ 善 信 房 ノ 信 心

生 如 三 專
 モ 如 来 ヨリ タ マ ハ ラ セ タ マ フ^{ヒヒ} タル 信 心 ナリ サレ ハ タ ヰ ヒ ト ツ ナリ 別 ノ 信 心 ニ テ オ
 モ 如 来 ヨリ タ マ ハ ラ セ タ マ ヒ タル 信 心 ナリ サレ ハ タ ヰ ヒ ト ツ ナリ 別 ノ 信 心 ニ テ オ

生 如 三 專
 ハ シ マ サ ン ヒ ト ・ ハ 源 空 カ マ ヒ ラ ン ス ル 淨 土 ヘ ハ ヨ モ マ ヒ ラ セ タ マ ヒ サ フ ラ ハ ・
 ハ シ マ サ ン ヒ ト ・ ハ 源 空 カ マ ヒ ラ ン ス ル 淨 土 ヘ ハ ヨ モ マ ヒ ラ セ タ マ ^{ヒヒ}ハ^{ヒヒ} ○^サ フ ラ フ ハ ・
 ハ シ マ サ ン 人 ・ 々 ハ 源 空 カ マ ヒ ラ ン ス ル 淨 土 ヘ ハ ヨ モ マ イ ラ セ タ マ ヒ 外 ・ ・ ・ ハ ・

専
 三
 如
 生
 ホトニコソアヒトモナハシメタマフヒト
 御不審ヲモウケタマハリ聖人ノオホ

専
 三
 如
 生
 セノサフラヒシヲモム^キヲ^マウ^シキ^カセ^マ^ヒラ^ラセサフラヘトモ^眼ノチハサ

専
 三
 如
 生
 コソ四度計ナキコト^ハニテ^重ハンスラメトナケキ存知^ハヒテカクノコ

專 ． ． ． ． ． ． ． ．
 三 ヒラセ・ハ ． ． ． ナリ
 如 ヒラセテサフラウナリ
 生 ヒラセテサフラフ □ □

專 一

三 ． 聖人ノ常・ノ仰_ト ． ． ． ． ． ． ． ．
 如 ． 聖人ノツネノオホセニハ弥陀ノ五劫思惟ノ願ヲヨク〈案スレハ ． ． ． 親戀
 生 ． 聖人ノツネノオホセニハ弥陀ノ五□思惟ノ願ヲヨク〈案ス□ハヒトヘニ親戀

按

專

三 一人カタメナリケリサレハ ． ソクハクノ惡業ヲモチタル身ニテ^{ア(重)}ケリケルヲタスケ
 如 一人カタメナリケリサレハ ． ソレホトノ ． 業ヲモチケル身ニテアリケルヲタスケ
 生 一人カタメナリケリ □サ □ハ ． ソクハクノ ． 業ヲモチケル身ニテアリケルヲタスケ

専

三

如

生

ントオホシメシタチタル本願ノカタシケナサヨト御述クワイ懐クワイハ・ヒシコトヲイマ、
ントオホシメシタチケル本願ノカタシケナサヨト御述懐サフラヒシコトヲイママ
ントオホシシ□□タチケル本願ノカタシケナサヨ□御□懐サフラヒシコトヲイママ

専 按

三

如

生

タ案スルニ善導ノ自身ハコレ現ニ罪惡生死ノ凡夫曠劫ヨリコノカタツネニ・・
タ案スルニ善導ノ自身ハコレ現ニ罪惡生死ノ凡夫曠劫ヨリコノカタツネニシツミ
タ案スルニ善導ノ自身ハコレ現□罪惡生死ノ凡夫曠劫ヨリコノカタツネニシツミ

専

三

如

生

金言

・・・流轉シテ出離ノ縁アルコトナキ身ト信知・セヨトノ・金言ニ少・・モタカ
ツネニ流轉シテ出離ノ縁アルコトナキ身ト・シレ・・トイフ金言キムケンニスコシモタカ
ツネニ流轉シテ出離ノ縁アルコトナキ身ト・シレ・・トイフ金言ニスコシモタカ

専 三 如 生
ハ
シ
サレ

ハセオワシマ・ス・カタシケナク我・御身ニヒキカケテ我・等・身・罪惡ノ

フセオハセマサス^{ハ(重)}□^{サ(重)}□^{レ(重)}ハカタシケナクワカ御身ニヒキカケテワレラカ身ノ罪惡ノ

ハセオハシマサスサレハカタシ(以下欠)

専 三 如 生
ス

フカキホトヲモシラス如来ノ御恩ノタカキコトヲモシラスシテマヨヘルヲオモヒ

フカキホトヲモシラス如来ノ御恩ノタカキコトヲモシラ^スシテマヨヘルヲオモヒ

専 三 如 生
ヒ
沙汰

シラセンカタメニテ^レヒケリ實^ト・ニ如来ノ御恩トイフコトヲハ沙汰ナク・

シラセンカタメニテサフラウケ^レリマコトニ如来ノ御恩トイフコトヲハサタナクシ

(以上欠) トイフコトヲハサタナクシ

人・

生 如 三 專
 テ我・モ人・モ ア シ ヨシアシトイフコト・ノミマウシアヘリ聖人ノ仰・ニハ善
 テワレモヒトモ・ヨシアシトイフコトヲノミマフシアヘリ聖人ノオホセニハ善
 テワレモヒトモ・ヨシアシトイフコトヲノミマウシアヘリ聖人ノオホセニハ善

生 如 三 專
 悪ノニ・総シテ・存知セサルナリソノユヘハ如来ノ御心・ニヨシト思・
 悪ノフタツ惣シテモテ存知セサルナリソノユヘハ如来ノ御コ、ロニヨシトオホシ
 悪ノフタツ惣シテモテ存知セサルナリソノユヘハ如来ノ御コ、ロニヨシトオ ホ □

生 如 三 專
 召・ホトニシリ・ト シ 重 タラハコソ善・ヲシリタルニテモアラメ如来ノアシ、ト思
 メスホトニシリトヲシタラハコソヨキラシリタルニテモアラメ如来ノアシ・トオ
□ スホトニシリトホシタラ □ ユ ソ ヨ キ ヲシリタルニテモ ア ラ メ 如来ノアシ・トオ

專

・・召・ホトニシリトホシタラハコソアシキヲシリタルニテモアラメ・煩惱具足

如

ホシメスホトニシリトホヲシタラハコソアシキサヲシリタルニテモアラメト煩惱具足

生

ホシメスホトニシリ□ホ□タラハコソアシサヲシリタルニテモアラメト煩惱具足

專

ノ凡夫・火宅无常ノ世界ハヨロツノコトミナモツテソラコトタワコトニテマコトア

如

ノ凡夫火宅无常ノ世界ハヨロツノコトミナモ・テソラコトタワコト・マコトア

生

ノ凡夫火宅无常ノ世界ハヨロツノコト(以下欠)

專

實・・

ハ

三

ルコトナキニタ、念佛ノミソマコトニテオワシマストコソ仰・セハハ・ヒシカ

如

ルコトナキニタ、念佛ノミソマコト(惠)ニテオハシマストコソオホセハ。サフラヒシカ

生

人・

候・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

實^ト・・ニ我・モ人・モソラコトヲノミマウシアヒ^ト・・中・ニヒトツイタマシ

マユトニワレモヒトモソラコトヲノミマフシアヒサフ^ラフナカニヒトツイタマシ

生

如

三

專

フ

キ

キコトノ^ト・・也・ソノユヘハ念佛マウスニ付・テ信心ノオモムキヲ・互^{ダカヒ}・

キコトノサフ^ラウナリソノユヘハ念佛マウスニツイテ信心ノオモムキヲモタカヒ

生

如

三

專

(以上欠)

サフ^ラフナリソノユヘハ念佛マウスニツイテ信心ノヲモムキヲモタカヒ

人・

人・

・ニ 問答シ人・ニモイヒキカスル時・人・ノ口・ヲフサキ相論ヲタ、カヒカタンカ

ニ 問答シヒトニモイヒキカスルトキヒトノクチヲフサキ相論ヲタ、・・・ンカ

生

ニ 問答シ^ヒトニ・イヒキカスルトキヒトノクチヲフサキ相論ノタ、カヒカタンカ

專

タメニマツタク仰ト・・ニテモナキヲモモコトヲモ仰ト・・トノミマウスコトアサマシ

如

タメニマ・タクオホセニテ・ナキ・・コトヲモオホセトノミマフスコトアサマシ

生

タメニマ・タクオホセニテモナキ・・コトヲモオホセトノミマウスコトアサマシ

專

候・・・

リ

三

クナケキ存知ト・・也・・コノムネヲヨク思・・時・心・・得ラルヘキ夏・

如

クナケキ存シサフヲウナリコノムネヲヨクトオモヒトキコ、ロエラルヘキコト

生

クナケキ存シサフヲナリコノムネヲヨクトオモヒトキコ、ロエラルヘ□□□

專

候・・・

言・・

ヲ

三

ニト・・也・・コレサラニワタクシノ言・・ニアラストイヘト・経釈ノユク道ヲ

如

ニサフラウ・・コレサラニワタクシノコトハニアラストイヘトモ経釋ノユクチ・

生

ニサ□□フナリコレサラニワタクシノコトハニアラストイヘトモ経釋ノユクチ・

生 如 三 專
リカナシキカナヤサイワイニ念佛シナカラ、真ニ報土ニ生セ・スシテ辺地ニヤトロ
・カナシキカナヤサイワイニ念佛シナカラ、真ニ報土ニ生セ・スシテ辺地ニヤトロ

生 如 三 專
トランコト一室ノ行者ノ中・ニ信心異・ナルコトナカラ、タメニナク、
トランコト一室ノ行者ノナカニ信心コトナルコトナカラ、タメニナク、
カ

生 如 三 專
染・テ是_レ・ヲ印_ス・名_付・テ歎異抄トイフヘシ外見アルヘカラスト_云
ソメテコレヲシルスナツケテ歎異抄トイフヘシ外見アルヘカラス・
シ 鈔
(以上欠) ナツケテ歎異抄トイフヘシ外見アルヘカラス・

生	如	三	專	生	如	三	專
一	一	・	・	中	後	・	・
法	法	・	・	狼	鳥	・	・
然	然	・	・	藉	羽	・	・
聖	聖	・	・	子	院	・	・
人	人	・	・	細	之	・	・
并	并	・	・	ア	御	・	・
御	御	・	・	ル	宇	・	・
弟	弟	・	・	ヨ	法	・	・
子	子	・	・	シ	然	・	・
七	七	・	・	无	聖	・	・
人	人	・	・	實	人	・	・
流	流	・	・	風	他	・	・
罪	罪	・	・	聞	力	・	・
文	文	・	・	ニ	本	・	・
				ヨ	願	・	・
				リ	念	・	・
				テ	佛	・	・
				罪	宗	・	・
				科	興	・	・
				ニ	・	・	・
				處	行	・	・
				セ	ス	・	・
				ラ	于	・	・
				ル	時	・	・
				、	興	・	・
				人	福	・	・
				数	寺	・	・
				事	僧	・	・
					侶	・	・
					敵	・	・
					奏	・	・
					之	・	・
					上	・	・
					御	・	・
					弟	・	・
					子	・	・

生	如	三	專
一番	一番	・	・
		・	・
		・	・
		・	・
西意善綽房	西意善綽房	・	・
		・	・
		・	・
		・	・

生	如	三	專
二番	二番	・	・
		・	・
性願房	性願房	・	・
		・	・
		・	・

生	如	三	專
三番	三番	・	・
		・	・
住蓮房	住蓮房	・	・
		・	・
		・	・

歎異抄異本研究
 对校本文篇

生	如	三	專
四番	四番	・	・
		・	・
安樂房	安樂房	・	・
		・	・

生	如	三	專
・	二位	・	・
・	法印	・	・
・	尊長	・	・
・	之沙汰	・	・
・	也	・	・

生	如	三	專
・	親戀	・	・
・	改 _メ	・	・
・	僧儀 _ヲ	・	・
・	賜 _ズ 俗名 _ヲ	・	・
・	仍 _テ 非 _ス 僧 _ニ	・	・
・	非 _ス 俗 _ニ	・	・
・	然間 _ヲ	・	・
・	以 _テ 禿 _ヲ	・	・
・	字 _ヲ 為 _ス 姓 _ト	・	・
・	被 _レ 經 _ニ 奏 _ヲ	・	・
・	聞 _ニ 了 _レ 彼 _ヲ	・	・
・	御申 _シ	・	・
・	状于今 _ニ	・	・
・	外記廳 _ニ	・	・
・	納 _ル ト	・	・

